家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

6

お茶の水女子大学
昭和
53.5.2
附属図書館

第七十七巻　第六号　日本幼稚園協会

新版 幼稚園

人間関係と学習の場

K・H・リード著
宮本美沙子・落合孝子共訳

B5変型判 416頁 2,500円

（従来の**「幼稚園」**の改訂版です）

この本は、1950年に初版が出されて以来、世界各国で翻訳されて人々に親しまれてきました。日本でも1966年に翻訳され、すでに20万人もの方に読まれ、幼児教育に多大の示俊を与えてきました。

このたび、アメリカ本国で改訂第6版が出版されたのを機に、新しく書き加えられた章ばかりでなく、全章にわたって新しく訳し直しました。

副題が、旧版の「人間関係の生活の場」から「人間関係と学習の場」へと変わっていますが、それは、今日、幼児教育における力点の置き方が変化していることを反映していることによるものです。

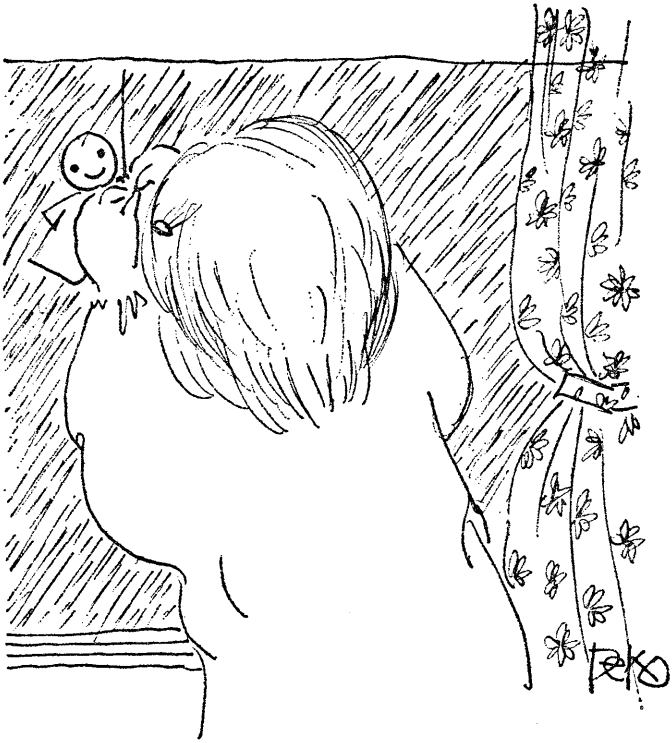
この本には、２歳から４歳までの子どもが、幼稚園でどのように新しい経験から学習し、どのように成長していくのか、子どもの十分な成長を助けるためには、先生はどんなことをすべきか、といったことが具体的に詳しく書かれています。最新の心理学の成果の上に立って書かれたこの本は、保育に携わる方の座右の書として役立ちます。

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・本社営業課　ＴＥＬ 東京(03)292－7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育

第七十七巻　第六号



幼児の教育　目次

——第七十七巻　六月号——

表紙　梶山俊夫
カット　中島英子

© 1978
日本幼稚園協会

「国際児童年」を迎えるにあたって……荘司　雅子…(4)
幼児とのり……林　健造…(6)
書物と糊……庄司　浅水…(8)
「和紙と墨」(書道用)をつくるときの〝のり〟について……戸田　金作…(10)
子どもとのり……原口　純子…(12)
幼児たちから学ぶかずかずのこと②……丸山　ふみ…(14)
★講演★
中国の近代化……市古　宙三…(16)

経験

——悲しい経験・その一——……村田　修子…(23)
私の幼児教育論（その二）……下山田裕彦…(26)
のりの思い出……岩淵　　恵…(32)
糊……堀合　文子…(34)
木材をつなぎ合わせる……山本　　孝…(36)
子どもの活動と保育空間（その一）……堀井　仁子…(41)
北国だより……白鳥美智子…(48)
ニューヨークの中の日本人（その二）
——子どもの世界——……佐藤奈美子…(50)
保育の体験と思索
——子どもの世界の探究——（十六）……津守　　真…(57)

編集委員　中村　英勝・守永　英子
本田　和子・田中三保子
編集主任　津守　　真・皆川美恵子

「国際児童年」を迎えるにあたって

荘司雅子

来年の一九七九年は国際連合が「国際児童年」として設定した年である。国連は一九五九年の総会に、「児童の権利宣言」を採択して全世界に児童の福祉の増進を呼びかけた。来年はちょうど二十周年にあたるので、国連はこの年を「国際児童年」とし、ワルトハイム国連事務総長が、国連加盟の一四九か国に、書簡を送り協力を要請している。

「国際児童年」を迎えるにあたって、各国は、それぞれに、それなりの重要性を深く認識し、「児童の権利宣言」を支持するための行事を行なうはずである。

昨年一九七七年九月に、私はスコットランドのエジンバラ近くのスターリン大学で開催された第十九回国際大学婦人連盟（ＩＦＶＷ）の国際会議に出席した。会議出席者は三つの分科会に別れて討議をした。そのうちの一つの分科会が「若い世代の教育」に関するものであった。

この分科会はさらにいくつかの小グループにわかれ、少数の人数で話しあいをした。私はそのうちの一つのグループに参加して、各国の幼児・児童の教育をきき、日本の現状を話した。このグループに参加した代表は約十二名で、カナダ、オーストラリア、イギリス、日本、オランダ、イスラエルそしてアメリカ合衆国などの諸国からであったから、主として先進国からの出席者であった。

共通の話題は、妊婦の保護と教育、乳児・幼児の教育、家庭教育、働く母親と育児の問題、マスコミや読み物の幼少年にあたえる影響などであった。どの代表も自国の現状を報告し、改善の方途に苦慮していると述べた。

三日間の各グループ、討議の結果を司会者がもちよって更に調整し、そしてこの「若い世代の教育」の分科会で討議された共通の結論をまとめ、今後の行動を進めることにした。

国際大学婦人連盟としては次のような行動を提案した。まず加盟国に次のことを奨励する。

1、国連総会で採用された「児童の権利宣言」を支持するため、政府が立法により児童の権利を保障するよう要求する

2、児童の権利宣言の趣旨を広め、「国際児童年」（ＩＹＣ）に向けての準備をＮＧＯ（国連内の非政府機関）と協力して進める

3、各国の立法に注意をはらい、児童に有利な法の強化に眼を光らせる

4、児童生徒と教師の異文化間交流を促進する

5、ＩＹＣに関する具体的計画を近隣の加盟国と共に行ない、その他の加盟国のために大小の計画について報告する

6、国連機関により資金を提供されるような計画を発展させる

7、暴力、ポルノ、マスメディアにおける一方的広告に対抗するため、女性同志手を結ぶ

次に各地方レベルでは次のような行動計画を進めること。

1、育児における両親の重要性について世論に影響をあたえる。これは

a 両親教育により

b 若者に親になるための教育をあたえるプログラムの計画により

c 男性を教育して父性に関する十分な理解をあたえることにより

遂行されるものである

2、育児中も女性が教育を受け、労働にたずさわる機会を用意すること

これは以下のことによって遂行される

a パートタイムの仕事、融通のある労働時間

b 再教育および新たな能力開発

c 託児所や保育所の整備

d 全家族員の義務の再検討

以上のような提案が採択され、「国際児童年」を迎える準備を各国に呼びかけた。

この国際会議の提案をまつまでもなく、わが国はすでに一九五一年に児童憲章が制定され、児童福祉法も制定されてすでに三十周年を迎えた。しかし立派な法はできても現実の日本の幼児や児童はほんとに幸せになっているであろうか。一九七九年「国際児童年」を来年に迎えるにあたり、わが国の幼児や児童の真の福祉を考慮しなければならないと思う。

（聖和女子大学）

幼児とのり

林　健造

一、舌切雀

舌切雀のお伽噺は、雀がおばあさんの洗濯のりをなめたために、はさみで舌を切られてしまいます。

雀の舌だから、さほどの量でもあるまいにこのばあさんは本当に残酷でケチです。だから、あくたのいっぱい入った葛籠を背負わされるはめになるのです。

このときの洗濯のりは、当然でん粉のりですから雀がなめるのです。樹脂系のセメダインなどだったらなめる筈はないし、それどころか上下の口ばしがくっついちゃって、雀もさぞ大事でしょう。これは少しわるのりでした。

二、幼児とのり

大体、造形活動の原理は、たし算とひき算です。プラスの造形は、のりを中心とした接着の造形です。マイナスの造形の方は、はさみを中心とした切ったり、分けたりする造形です。

幼児は紙に出合うと、"Who are you?" と問いかけると同じ気持で、それを破いたりちぎったりして遊びます。これを通して材料体験をしているわけです。次に、のりに出合い、ものとものとがくっつくことを覚えると、急激にその子の造形の幅が広がります。

三、のりつけ指

ところが中には、のりづけの嫌いな子がいます。手が汚れるから嫌いというのもありますが、その原因の一つに〝のりつけ指のしつけ〟があります。

よく教師の中には、〝のりは中指でつけるのよ、他の指はだめよ〟などと喧しくいう人がいます。

造形活動の中で、技術に関わるところは、教えることのできる処ですが、だからといって強制すると、もうそれだけで幼児は作ることまで嫌いになってしまうことがあります。

この〝中指のしつけ〟も、考えてみるとまったく大人の発

想で、のりのついた中指を使わず、人さし指と拇指で紙をつまんで貼るのに都合がよいということなのです。

ところで五指のうち、一番使い易い便利な指は、はたして中指でしょうか。

紙の隅々までのりをつけるなどという高等技術は、よほど使いやすい指でないと無理です。私はどうも中指よりは人さし指が使いやすいと思います。その証拠に、鼻くそなどをほじるのに中指を使っている子は見たことがないし、またデパートの玩具売場などで、〃ママー、あれ買ってェ！〃と駄々をこねてる子どもも、中指で指さしている子など見たことはありません。

幼児時代は、使いやすい指でつけさすことがのぞましいことで、人さし指が汚れてこまるなら、むしろ手ふきの布を用意することの方がずっとよいと思います。

四、のりのクリーム

おかしなしつけといえば、のりに関してはもう一つあります。

〃のりはべたーんとつけないで、よく指であちこちにのばして、紙全体につけるのよ〃と、いつもいつも同じことをくり返していう人があります。

中には、〃ママのお顔のクリーム〃などの例話を使って〃のりのクリーム体操〃などというう巧い手を使う人もいます。

「ママはお顔にクリームを塗るとき、ちょん、ちょんとつけてから手で、あっちこっちにのばすでしょう。だからおのりも……」

というわけですから、これものりは紙全体にのばしてつけるということには変りありません。

ところでいつもいつも紙全体にのりをつけていたら、えらいことになります。

輪つなぎなどはできません。これはテープの一辺にだけのりをつければよいのです。そのように、ある部分にちょんとつければいいときもあるのですから、そのときどきによって対処できるように指導すべきだと思います。

一般にのりはたくさんつけ、早く貼ると着くと思われがちです。どののりもちょっと待つ（オープンタイム）が必要です。とくにセメダインなどの接着剤は、指でつけないこと、つけたら10位数えてからはることが肝心です。

（十文字学園女子短期大学）

書物と糊

庄司浅水

一冊の本は糸や針金で綴じ、膠や糊などの接着剤を用いてまとめ上げる。

ところで、本の歴史を繙くと、その形態は洋の東西を問わず、巻子本（巻物）ではじまる。

古代エジプトでは、ナイル河畔に繁茂するパピルス（papyrus）―「紙」（paper）の語原―という水草の茎の髄で紙のようなものを作り、それを継ぎ合わせて書写の料に供した。これを巻物の形にしてヴォリューメン（volumen）と呼んだ。「巻かれたもの」の意で、本を一巻（one volume）、二巻というのはここから来ている。

当時パピルスを継ぎ合わせるのに何を用いたか。「膠様のもので」とあるが、おそらくアラビアゴムなどが使用されたのではあるまいか。アラビアゴムはアフリカ西岸・ナイル河地方に産する、アラビアゴムの木から採取するもので、ゴムの木はマメ科の常緑高木、高さ七メートル内外、葉は羽状の複葉、白い花が球状に集まって咲く。幹の分泌液をかわかして固めてつくる。成分は複雑な高分子多糖類で、水によく溶け、コロイド溶液を作る。今日文房具店などでも売っているもので、接着剤などに使われている。

本の接着剤としては膠と糊がある。

糊といっても一様ではなく、用途によって、種々の材料でつくったものが用いられる。磐石糊・生麩糊・姫糊・微塵粉糊・蕨糊・デキストリン（可溶性澱粉）・蛋白糊・カゼイン（酪素の一種）・化学糊（ボンド糊など）などがある。

磐石糊は小麦とライ麦でつくったもの、生麩糊は小麦粉を水で練り固め乾燥させたもの、姫糊は粳米からつくる（これにサリチル酸か硼酸のような防腐剤を入れるとゴム糊ができる）。それぞれ向き向きがあって、たとえば生麩や姫糊に磐石をまぜ合わせたものは粘着力が強く、姫糊や生麩糊でよく着かないものに用いられる。しかし通常は姫糊や生麩糊で用

が弁じ、姫糊と生麩糊とでは前者の方が粘着力がある。

姫糊は米、生麩糊は麦から出来ているので、同じ糊でも性質が違う。どちらも千倍ないし二千倍の石炭酸（フェノール類）か昇汞水をまぜて腐敗を防ぐ。製本用としては姫糊は主として貼り付けものに用い、生麩糊は表紙の見返し紙の糊入れ（表紙と見返し紙との貼り合わせ）や、板紙の貼合わせ、紙の裏打ちなどに使用される。糊に少量のフォルマリン溶液を加え、よくまぜ合わせ（腐敗を防ぐため）、香料を加えれば市場で売られているヤマト糊と同じものができる。

明治期以前のわが国の本の多くは、ほとんど和紙を用い、和装本（和とじ）であった。和装本はよく「紙魚の棲家」などといわれる。和紙には紙魚の好む材質がふくまれているが、和装本には角ぎれその他糊を使う部分が多く、紙魚や鼠などの虫害にかかりやすい。貴重な古写本や古版本がひどく虫喰いにあっているのを見ると悲しい想いがする。

むかし装潢匠といった和本の製本師や表具師などは、生麩糊をたくさん造り、大きな土瓶に入れ、床下などの涼しい所に何年間も保存しておいた。糊がよく練れて使い易くなるのかもしれない。

洋装本の背固め・背貼り、表紙貼り等には、接着剤として膠が用いられる。膠は魚や獣の皮・骨などから精製される。海外では用途によって背貼り用にはフレキシブル・グルー、表紙貼り用にはコールド・ブック・グルーが使用される。

革装の表紙作りには糊、製本用クロスの表紙貼りには膠、布装や紙装の表紙には糊を用いる。用途によって膠も糊も溶液の濃淡が工夫されなければならない。また寒暑によって防腐剤や乾燥を防ぐ処置も適当に講じなければならない。

最近、糊や膠の代りに「ボンド糊」などの商品名で売出されている、合成樹脂系の接着剤が多く見られるようになった。アクリルニトルを加水分解してアクリル酸とし、これにメチルアルコールを作用させ、溶剤に溶解したアクリル系樹脂接着剤や、ポリ酢酸ビニールにアセチレンを作用させ、溶剤に溶解したビニール系樹脂接着剤は、革やクロス・布・紙などの接着、貼合わせなどによく用いられる。ことに最近のように製本が大量化され、機械化されるにしたがい、樹脂系接着剤の用途はますます拡大するばかりである。

だが、手工的な手づくりの製本には、化学糊ではない従来の糊や膠が使われており、愛着をおぼえる。

（京都外国語大学　書物研究家）

「和紙と墨」（書道用）をつくるときの〝のり〟について

戸田金作

読者のみなさんは、今までに一度や二度、美術の秋を飾る「日展」をご覧になったと思います。ここでもう一度「日展」第五科・書の会場に展示された各書家の作品を思い出してみてください。

書は中国・朝鮮・日本など、ごく限られたアジアの漢字文化圏のみに発達したもので、現在わが国では文字を素材とした一種の造型芸術としてあつかわれています。

芸術としての書は、各作家がもっている思想や感情などを作品に表現するのですから、線の墨色や・にじみ・かすれ・といった各々の作家がつくり出す固有の表現を受けとめることが出来る質の良い紙や墨が要求されます。

もともと紙と墨は、書のために生れたものであり、いわば夫婦のようなあいだがらで、紙は墨との、墨は紙との相性を考えてつくられています。

(一) 和紙とトロロアオイ

和紙は、こうぞ・みつまた・がんぴなどの木の皮から採集した糸状の長い繊維を、さらに臼でたたき、細く短くしてつくった繊維の液にトロロアオイの根をつぶしてつくった粘液を加え、すだれ状の網で漉いた繊維層を乾燥させたものです。

繊維液に加えるトロロアオイ（黄蜀葵）は双子葉植物・アオイ科の一年草で、根に多量の粘液質をふくんでいるため、薬剤の粘滑剤や錠剤の賦形剤としても使われています。

ここで注目したいことは、紙漉きの工程で繊維液に加えたトロロアオイが、すだれのすきまから繊維が水といっしょに流れるのを防ぎ、一定の厚さの繊維層を網の上につくる働きを助けると、次の乾燥工程で姿を消してしまうことです。

私たちは、トロロアオイがそのまま残って紙の組織である繊維と繊維を接着させる役割を果すものと考えていたのですが、トロロアオイの方は、その役割は自分よりも、こうぞ・みつまたなどの繊維自体がもっているセルロースの接着性にまかせた方が、墨液との親和性がよくなることを知っていたようです。

墨液が紙の組織に浸透するのは繊維と繊維の空間によって生じる毛細管現象の働きによるもので、墨液が紙の組織の深いところに届けば届くほど墨色がよくなることから考えて、異質の接着材を使って毛細管現象の条件を悪くするより繊維自体の接着性を利用した方がより効果的であることはいうまでもありません。先人たちが発見した素晴らしい生活の知恵といえましょう。

(二) 墨と膠 (ニカワ)

墨は、なたね油・ごま油などを燃やして採集した煤(すす)を膠の溶液で練り、木型で成型し乾燥させたものです。

煤を練るときに使う膠は動物の皮や軟骨などにふくまれているコラーゲンをゼラチンに変えて抽出したもので、水をすって膨潤し、熱湯によくとけて粘稠液となりますが、冷却すると固化しますので、木材・紙・布などの接着材として用いられています。

ここで注目したいことは、(1)煤から墨をつくる工程、(2)墨から墨液をつくる工程、(3)墨液から文字をつくる工程で膠が示す挙動と役割の変化です。

もともと膠は、水に対して親和性をもたないが、煤と繊維に対しては親和性をもっているため、(1)の工程では煤の粒子を一粒ずつ薄い膠の膜で包み水分を排除して墨の賦形を助けます。(2)の工程では墨と硯の摩擦によって生じる熱の力を借りて、煤の粒子を包んだままの姿で水の中に分散し優れた墨液をつくります。(3)の工程では硯の中の墨液が紙の上に到着するまで筆に停る働きを助け、墨液が紙の組織に浸透し乾燥すると、煤と繊維を完全に密着させます。書の墨色が永久に変らないのは煤と膠を使っているからです。

みなさんは古い家の玄関で、文字以外のところが擦りへっているにもかかわらず、文字の部分だけが鮮明に浮き出している表札をご覧になったことがないでしょうか、これなどは煤と膠の合作がもたらした驚くべき一例です。

和紙と墨づくりは、〝のり〟の親和性をたくみに利用して効果をあげた実例であると思います。

(教育映画監督)

子どもとのり

原口純子

ぬるぬる　べたべた　にょろにょろ　ねばねば、のりはねばり、のりは手をよごし、のりは紙をくっつける。このごく日常的な材料にも、よく見るとさまざまな側面と、問題点が観察される。

のりと子どもについて考える場合、大きく分けて二つの面が考えられると思う。一つは紙などをくっつける接着の手段としてののりであり、もう一つは、のり自体を活動の目的とする場合である。

○接着の手段としてののり

保育の活動の中でも、時代とともにさまざまな教材や教具がはやったり廃(すた)ったりするが、のりは今やひどく斜陽化した教材の一つと言えよう。たとえば、テーブルの上にのりと、セロファンテープとが出ていると大半の子どもはセロファンテープの方に手をのばす。輪つなぎや、画用紙の上に切り紙・布・毛糸などを貼りつけるような遊びですら、放っておけば子どもたちは上からセロファンテープやホッチキスでおさえつけ、のりを使おうとはしない。セロファンテープや、ホッチキスが好まれるのは手もよごれず簡便ですぐにくっつくことと共に、何より表面から接着できるため、子どもにとって使い易いからであるように思う。そしてこれらの用具の出現ほど保育の活動（とりわけ製作活動）における画期的な進歩をもたらし、活動の可能性を広げたものはないと思う。平面を立体にするのでも、立体と立体とをくっつけるためにも、セロファンテープは子どもの持つイメージを自分自身の手で具体化することを容易にしたのである。

これに比べると、のりは手にねばりつくこと、接着したいものの裏側につけなければならないこと、のりはつけすぎるとよくくっつかないこと、乾くまでしばらくじっと待たなければならないことなどの点で劣っている。このことを考え合わせると、一見した限りでは、のりはあまり子どもに適したものとは言えないように思われるかもしれない。

しかし、子どもの仕事であれ、大人の仕事であれ、簡便さにまかせて何でもテープや針で上からくっつけてやるテカテカ、ガサガサした仕事は好ましいものではない、便利であっても、作り出されたものが美しいとは言えないからである。

のりの仕事は手はかかっても美しさを出すことができる。たとえばぬれると伸び、乾くと縮む紙の性質と、水分の多いのりとがぴったり合わさって貼り上った襖や障子の美しさをおもいおこしてみるとよい。そこには、手軽な仕事には見られない粋が感じられる。

先日子どもと一緒にペープサート作りをしている時、ふと思いついて、セロファンテープやホッチキスでとめるのをやめ、化学接着剤(ボンドなど)とのりとでくっつけたことがあった。しばらく乾かしてみたところ、いつになくしぶうちわのようにしっかりしたペープサートができあがった。かなり雑に扱ってもこわれることもない。のりの良さを再発見した思いがした。

私はかねてより、事務用ののりでなくて、もう少しよくくっつく子どもに適したのりはないものかと思っていたが、前述のボンドのようなものが適当であることを発見した。そういえば、先年、アメリカのあるナースリースクールに子どもを通わせていた時、そこではよくカラー画用紙の上に貝がらやマカロニ、ボタン、毛糸、布切れなどをのりではりつける遊びをしていた。こののりは、化学接着剤(ボンドのようなもの)で比較的早く乾き強力な接着力を持っていた。このような私の経験から判断すると、この種の材料をもっと取り入れて活用することを検討することが望ましいように思う。

○のりあそび——フィンガーペインティングなど——

近ごろ私の興味を引きつけるものの一つに「手ざわり、肌ざわり」の問題がある。接着というところに着目すると、のりはあまり子どもに好まれないと言えよう。しかしあのぬるぬる、ねばねばした感触を大々的に利用してのりを活動に取り入れると様相が一変してしまう。これは、フィンガーペイントやプレイドウの活動そのものであり、子どもに人気のある活動である。

乳幼児期は触感覚の時代であり、触って確かめるということは、物の本質を知る上で大変大切なことである。生きた子猫を抱いた感じや、流れる水に手をさらした感じなどと同様、フィンガーペイントの感触やプレイドウの肌ざわりは、理屈を越えて、知識や人格のベースを養うもののように思われる。のりのねばねばした感触、ぬるぬるした感触等を遊びに利用することの意義は大きく、のりを今一度角度を変えて見なおしてはいかがなものであろうか。

(桜村立竹園東幼稚園)

幼児たちから学ぶ
かずかずのこと②
―水色のノートから―

丸山ふみ

つみ草をする幼児から

園庭の若葉がしだいに青葉にかわってくる頃になると、いつの間には幼稚園内を入園式に泣いていた四歳児が主役のような表情で動いているのに出合って〝ハッ〟としたり、思わず声をかけて幼児からかえって不審な眼でみられ自分の失敗に気付くことがあります。

新入園児も幼稚園での一日のリズムがわかり、それぞれの幼児が自分の意志で遊びはじめ五歳児も年少児へのもの珍しさがうすれ新しい組での友達関係の中で安定した気持で遊びはじめます。この頃になると教師もまた、安定して幼児のしぐさに眼をむけられます。

この頃には園庭に緑の絨緞を敷いたようなクローバーが白い小さい花をつけて幼児達の遊びの相手をしてくれます。

この花が江戸の昔、オランダからガラスの器具などを運んだ時こわれないようにと、この草の枯れたのを品物のまわりにつめたところから「つめ草」という別名がついたと『ことばの歳時記』（金田一春彦著）に記されていますが、幼児達が毎日毎日摘んでも摘んでも次々と花を咲かせてくれるので「つみ草」と名付けたくなります。

五月晴れのある朝、私も門での幼児を迎えることが終って、四歳児が数名集まっている傍へしゃがみ、摘みながら仲間に入れてもらえるのを待ちました。

ところが、茎の下部から人さし指と親指で摘める幼児は少なく、むしりとるとかひきちぎるという表現が似合うような手の動き方なのです。その上、摘んだ花を束ねもつ片手の動きもぎごちなく気になります。茎が折れる程強く握っている幼児や、摘んだ花が落ちてしまうような握り方もあるのです。

四歳ではまだこのような動作がうまくいかないのかと考えている私の視線をとらえた幼児に「先生、輪ゴムちょうだい」と声をかけられ成程とうなずき立ち上がった私の心の中は複雑でした。職員室から持ってきた輪ゴムを、掌を差出す

三名の幼児たちに一つずつ渡し今度は私が待ちました。

手と物との協調が文化的な世界への適応を獲得していくといわれているが、「輪ゴム」を要求できるこの幼児たちの先刻の指の動きを思うときどんな束ね方ができるのだろうということに私の期待が移っていました。

長短不揃いの白い花の束の上方から輪ゴムを通したり、茎の下からとおしたりはできるのですが、輪ゴムを束ねた茎の間に空間があっても気にはならない様子なのです。

一瞬、こんなに互いに友達と輪ゴムを共通に扱うことで仲よしのシンボルにしているのかと思った程でした。しかし、三メートル程向うで担任が友達と花をつないで頭や胸に飾って遊んでいるのをみつけ、その方へ馳けていこうとしたので、もう待ってはいられません。

このように輪ゴムを通しただけで、束ねたと幼児が思っているのかと、その行為の是非を判断したのでもなく、私の手の方が早く出てしまいました。

今にも落ちてしまいそうな輪ゴムを幼児の目の前で必要以上に伸ばしてみせて、次に言葉で「ね、これを一回かえしてから通すの」と教えました。三名のうち一名だけしかできず、手伝ったのですがしっかり束ねられて幼児の表情は満足そうでした。「輪ゴムが欲しい」といえても使えないということが私達の課題になります。

雨の日にも

大人の生活が合理化され、共に生きている幼児たちが私たちに提案してくれたことの一つに洋傘の持ち方があります。

自動車に乗せてもらって成長した幼児にとっては、雨の日に洋傘をさすことは初めての経験かもわかりません。頭上にひろげた傘を大人のように片手で持つから、わずかな風にも洋傘をとられて髪や服を濡らしています。

〃雨が降る〃という自然の営みにさえ無防備な幼児達のために雨の日洋傘の花を園庭に咲かせた組もいます。幼児達は教師の心の中を知らされず、水たまりやかたつむりをみつけて喜んでいます。

生活していくのに大切な幼児の手が職員の廊下での立話の話題になりました。

（松阪市立松江幼稚園）

★講演★

中国の近代化

市古宙三

（一九七八年一月十七日に幼児教育現職研究で行なわれた講演より）

近代文明の摂取の仕方

私は、中国の歴史を専門にやっているんですけれど、中国と日本とを比べてみると、いろいろと違う点があると思います。私がひとつ問題に思っているのは、西欧の近代文明をいかに摂取していくかの過程についてであります。

日本も中国も西洋の近代文明に接するようになったのは、ほぼ時を同じくしています。しかし、その結果を見ますと、随分、隔りがあります。通俗的な言葉で言えば、日本の方が早くて、中国の方が遅いのです。

どうしてかということは、いろいろな人が問題にしています。中国は日本なんかと比べものにならない程、図体が大きいので、「大男、総身に知恵が回りかね」式に、なかなか早くはいかないという点もあった

かと思います。

しかしそれよりも、外来の文明に対する態度、摂取の仕方に、日本と中国では大きな違いがあったのではないでしょうか。

東アジアの地形

第一に、中国人の場合には、外から取り入れるような、すぐれた文明をその周辺にもっていませんでした。これは日本と非常に違っています。

家に帰ったら地図を広げて見て下さい。中央アジアに世界の屋根といわれるパミール高原があります。ここから東北の方面に山脈が走って、オホーツク海に行っています。パミール高原から東南の方へは、やはり山脈、高原、密林が走って、東南アジアの方へ行っています。

今日であれば、中国からソ連に行くとか、印度、ヨーロッパに行くなんてことは、ひとっ飛びで、何でもありませんけれども、飛行機や汽車、汽船もなかった十八世紀以前でありますと、今では何でもなくても、あの高原、山脈や砂漠地帯は、天然の障壁でして、これを乗り越えることは、まず不可能とされておりました。

ですから、パミール高原を扇の要としまして、東に向けて開いている扇状の地帯、これを東アジアというんですけれども、ここは、他の世界から隔離された世界で、東アジアだけが、ひとつの世界を形成していたといっていいでしょう。

この東アジアを見てみますと、中国のほかには、ろくな所がありません。いい所と言いますと、黄河とか揚子江、珠江であるとかいう大河に灌漑されました、中国の平原だけです。その周りは、砂漠であるとか、高原であるとか、密林であるとか、あるいは、東へ行くと日本のような小さい島だとかで、ろくな所がないんです。

昔から東アジアで文明が栄えた所は、どこかといいますと、黄河や揚子江の流域の、あの中国、中原の平野で、ここ以外に文明の花を咲かせたような所はありません。人が住んでおりましても、食べてゆくのがやっとで、文明の花を咲かせるような余裕がないわけです。

ですから、東アジアという、ひとつの隔離された世界では、中国人の、漢民族の住んでいた所だけが、良い所であって、ここには、三千年、四千年の昔から文明の花が開花しております。でも、ここ以外には、中国文明に匹敵するような文明は発達しませんでした。

もちろん中国の周りには、野蛮な武力の強い連中は住んでいます。チベット人、トルコ人、モンゴル人などがそれです。この連中が中国の中に攻め入って来たことは、何回もあります。そしてこの連中から、武器や戦争の仕方を学んだことはあります。

しかし中国人にいわせれば、そんなものは文明ではありません。野蛮です。文明に関する限り、トルコ人やモンゴル人は何も持っていず、中国の文明を学びに来たんです。ですからこの連中に、中国は何度も支配されたことがありますが、その支配は、政治的、軍事的なもので、文化的には逆に中国文明に支配されたのです。

こういう状態ですから、学ぶようなものは、周りに何もないわけです。日本なら、外来文明にすぐ飛びつきますけれども、飛びつくような外来文明を中国は持っておらなかったのです。

極楽浄土と仙境

もちろん、私は東アジアが隔離された世界だといいましたけれども、全く隔離されていて、少しも抜け道がないというわけではありません。ですから中国へも、外来文明が伝わって来たことはあります。皆さんも御存知のように、一、二世紀のころ、仏教が印度から中国に伝わって来ました。

しかし、その受け入れ方がストレートではないんです。ストレートでないということは、どういうことかと申しますと、仏教にいう極楽浄土というのは、死ななければ行けない所です。ところが中国人は、この極楽浄土を、はじめは、仙人の住む仙境のことだと思っていました。

仙境というのは、東海の三神山のように、不老長生の薬を持っている仙人の住む所です。これは、極楽浄土と似ていますが、本質的に全然違うんです。極楽浄土は死ななければ行けない所です。ところが、仙人の住んでいる所、仙境は、なかなか行けないけれども、絶対に行けないというわけではない。死ななければ行けないというのではなくて、現世の延長にあるんです。ユートピアなんです。極楽浄土とは性格が違うんです。

ではなぜ中国人は古くから、死後の世界ではなく、現世の延長に、理想郷を描いたのでしょうか。それは中国人が現実的、現世的であったからだと思います。中国人にとっては、死後の世界など、どうでもいいんです。

現世において、もっとお金持ちになりたい、もっとおいしい物を食べたい、暖かい所に住みたい、長生きしたいのです。中国人は、極楽浄土のような所よりも、不老長生の薬のある仙境のような所に非常に魅かれるわけです。

仙人の住む所と極楽浄土とでは全然違います。それなのに極楽浄土を仙境と考えたとしますと、それは、仏教の教えを正しく受け入れたことにはなりません。中国的、伝統的な考えで読み直しているわけです。

だんだんと仏教を勉強していくうちに、本当の極楽浄土は仙境と違う、こういうも

のなんだとわかってゆくけれども、仏教がわかるまでには長い時間がかかってしまうんです。そして、長い時間をかけて、伝統的なもので解釈している間に、本のものが歪んでしまいます。

印度の仏教とは違った、中国式仏教が誕生するわけです。歪んだといっても決して悪い意味ではありません。中国の伝統に根ざした、中国の国土、国情にふさわしいものになっているのです。

議会制度

中国が西欧の近代文明を摂取する場合にも、この仏教の場合と同じことがいえます。例えば、日清戦争の後になると、議会政治を中国でも行なおうという運動が起こります。中国には今まで議会というものがない。日清戦争の時に、中国が日本に散々に負けてしまったのはどうしてかと言うと、日本は戦争するとかしないとかいうことを、天皇が一人で勝手に決めるのではなくて、国民の代表が集まっている議会で決めている。だから国民は、皆、戦争をしているという気になるから、一致団結して戦争をすることができます。

ところが中国には議会がない。戦争は上部の連中が勝手にやっているので、国民は無関心、これではとても勝てません。どうしても議会をつくらねばならない。

そういう所から、日清戦争のころ、西欧の議会政治を熱心にとりいれようという運動が起こりました。その中心人物は、皆さんも御存知と思いますけれど、康有為という人です。彼は議会政治は、今日、ヨーロッパの国々が持っていて中国にはないけれども、中国にもともとあったものなんだといいます。

なぜかというと、『書経』に、「謀リテ卿士ニ及ビ、謀リテ庶人ニ及ブ」とありません。この「謀リテ卿士ニ及ブ」というのは、上院の制度で、「謀リテ庶人ニ及ブ」というのは、下院の制度だというのです。

また『孟子』の中に、「左右皆殺スベシト曰ウモ、聴ク勿レ。諸大夫皆殺ス可シト曰ウモ、聴ク勿レ。国人皆殺ス可シト曰イ、然ル後之ヲ察シ、殺ス可キヲ見テ、然ル後之ヲ殺セ」とありますが、康有為はこれも二院の制度だといいます。

康有為によれば、昔は中国にもちゃんと二院の制度があったんだけれども、その後、秦の始皇帝が出てから時代が悪くなってしまって、二院の制度がなくなった、だから今、自分はイギリスやアメリカのまねをしようと言っているのではなく、昔からあったものを復活しろと言っているにすぎないというのです。

もしそうだとしますと、孟子の中には、非常に民主的に見える点があります、けれども孟子の考え方は民主ではありません。

君とは、民を使うものなんです。民とは君に仕えるもの、使われるものなんです。孟子の言っているのは、君は民を使っていい、ただ君が民を使う場合に、殴ったり乱暴したりしてはいけない、使われる人のこともよく考えて使えと言っているのであって、決して民主という考え方ではないわけです。

民は主人ではありません。ただ民は本で、民の身になり、民のことを考えて、君は政治を行なわなければいけないというので、私たちの学生の頃は、孟子の思想を民本思想などと申していました。

康有為は議会を民本主義の産物と見ていたのです。民主主義とは中国に伝統する民本主義だと思っていたわけです。そうしますと、西欧の民主主義はこういうもんだと本当に理解するまでには、うんと時間がかかります。

しかし、西欧の民主主義を一応自分の伝統的なもの、民本主義で理解するので、うんと時間はかかるけれども、まさに中国の国土、国情にふさわしいところの民主主義というものが中国に生まれてきます。

「大同」の世

これと同じようなことは、社会主義、共産主義についてもいえるのではないでしょうか。毛沢東は理想の社会を、国家もない階級もない社会と考え、これを「大同」の世といっています。実は「大同」の世を理想の社会とするのは、何も毛沢東に限ったことはありません。太平天国の洪秀全も、さき程お話ししました康有為も、理想郷を「大同」の世といっています。

この「大同」の世は、『礼記』の「礼運」という篇に、次のように書かれています。

大同ノ行ワレシヤ、天下ヲ公ト為ス。賢ト能トヲ選ビ、信ヲ講ジ睦ヲ修ム。故ニ人独リ其ノ親ヲ親トセズ、独リ其ノ子ヲ子トセズ。老ヲシテ終ル所アリ、壮ヲシテ用イル所アリ、幼ヲシテ長ズル所アリ、矜寡孤独廃疾者ヲシテ、皆養ウ所アラシム。男分有リ、女帰有リ。貨ハ其ノ地ニ棄テラレルヲ悪ミテ、必ズシモ己ニ蔵セズ。力ハ其ノ身ニ出デザルヲ悪ミテ、必ズシモ己ノ為ニセズ。是ノ故ニ謀ハ閉ジテ興ラズ、盗竊乱賊スナワチ作(オ)ラズ。故ニ外戸シテ閉ジズ。是ヲ大同ト謂ウ。

太平天国では儒教の経典は読んではいけないことになっていて、学校で教科書に使われるのは漢文に翻訳された『旧約聖書』、『新約聖書』です。洪秀全の思想もこれに拠っているわけですが、彼はバイブルの解釈を宣教師から学んだわけではありません。自分で勝手に解釈したのですが、その時、彼の頭の中にあったものは、儒教的な物の見方、考え方以外の何ものでもありま

せん。前に申しました『礼記』の「大同」の世で以てバイブルを解釈し作りあげたのが、洪秀全の理想の社会です。それは『天朝田畝制度』という冊子に書いてあります。

康有為は理想の世界をえがいて、『大同書』という本を書きました。これに書いている理想の社会というのは、次のようなものです。

一、対立する国家は世界に存在しない。世界にはただ一つの総政府があるだけです。また全世界は幾つかの区に分かれていて、区ごとに一つの政府があります。

二、総政府、区政府は民選で作られます。

三、男女は契約結婚をして、同棲の期間は一年以内とします。但し両人が合意すれば、契約を更新することも出来ます。

四、女子が妊娠しますと人本院に入り胎教をうけます。生まれた子どもは育嬰院で育てられます。

五、子どもが六歳になると小学院、十歳になると中学院、十六歳になると大学院に入り教育を受けます。

六、二十歳で大学院を卒業した者は、政府の命令で農業、工業などの生産事業に従事します。農工商業はみな公営です。

七、失業者は恤貧院に、病人は医疾院に、六十歳以上の老人は養老院に入ります。

八、死ぬと考終院というものがあって、一切の面倒を見てくれます。死体は火葬にし、火葬場の近くに肥料工場を作ります。

九、人本院から考終院にいたるまでのすべての院は公営で、誰でも無料で入り、最高の享楽を得ることができます。

十、宿舎、食堂も公営ですが、費用は各人が労働で得た報酬で支払います。

十一、怠け者は最も重い刑罰に処せられます。

十二、学術上の発明をした者、人本などの諸院で働いて功績のあった者は特別に賞します。

康有為のこういう考え方は、彼が西洋思想を学んでから作られたものですが、その根本には矢張り中国伝統の大同の思想があったことは間違いありません。

人民公社

毛沢東の場合はどうでしょうか。みなさんもよく知っていますように、毛沢東は一九五八年から人民公社をつくりました。これは年が経つにつれて随分変わってきますが、これからお話しするのは最初のころの

人民公社です。

当時の公社は、わかり易く申しますれば、平均五千戸、二万乃至二万五千人の集団農場のようなものです。但し西洋人が「コミューン」と申しますのでもわかりますように、農業生産の組織であるだけでなく、工業、商業、教育、軍事の組織単位でもあり、また同時に行政の単位でもあります。

ではこれから農業についてだけお話ししましょう。土地は全部公社のもので、農器具も種子、肥料などもみな公有のものです。各農家は公社の計画に従って、共同して耕作に従事します。報酬は半賃金、半供給といって、賃金の方は働き振りに応じて違いますが、日常必需の物の多くは公社から誰でも同じように支給されます。供給の多いところになりますと、例えば河南省の安豊人民公社では、「十三の保障」といって、家も着物、寝具も靴も食事も、みな公社から与えられます。そのほか出産、育児、教育、結婚、医療、葬式はみな無料、理髪、観劇もただですし、男子六十五歳、女子六十歳になりますと労働を免除され、幸福院（養老院のこと）で生活します。

社会主義の社会では労働に応じて分配されるのですが、人民公社では、日用必需の品は労働に応ずるのでなく、誰にでも同じように分配されます。中国では、ソ連に先んじて共産主義の社会になったと、人民公社を誇りました。

詳しくお話しする時間がありませんが、これは太平天国の理想とする社会にとても似ています。そして太平天国の理想の社会は、ほとんど西洋に学ぶ所はなく、専ら『礼記』の大同に学んだことは、さきに申しました。そうしてみますと、毛沢東の理想の社会も、彼がマルクス・レーニン主義に学んだことは明かですが、この理想の社会の構想を形成する中に、中国伝統的な大同の思想が入っていることはほとんど間違いないでしょう。マルクス・レーニン主義をそっくりそのまま真似るのではなく、マルクス・レーニン主義を中国の伝統思想で解釈することも、毛沢東の場合に有って、それ故に中国の国土や国情にふさわしい、ソ連のマルクス・レーニン主義とは違った、中国のマルクス・レーニン主義が生まれてくるのだと思います。

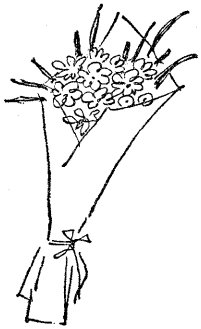
こう考えて参りますと、「近代化が遅い」などといって馬鹿にするとしたら、それは大変です。外来の文明をせっかちに採り入れるのでなく、ゆっくりと採り入れ、自国の風土や国情にふさわしいものにすることこそ、大事なのではないでしょうか。

（お茶の水女子大学長）

経験

――悲しい経験・その一――

村田修子



四、五、六月と月日が進むのは至極当り前のことで、特に六月の終り頃からは幼稚園のふん囲気も、四月当初の、かっかとした気分から一応落着きがみられるようになって、子どもたちも先生も、楽しむという感じになってきます。

そういうよい時季に、私は一生忘れられない、という経験をしました。

三歳で入園してきたとき、小さくて、色が浅黒いのでよけいにきりりとしまって見えるNちゃん。一人っ子のため少し甘えん坊でいて、そして鼻柱のつよいところもあって、大人の中にいるせいか、私の心の動きを感じる敏感さを持っています。その位ですから、自分も表情が豊かで一口にいえば愛くるしい子どもでした。

当然お母様も同じタイプ。何か失敗ごとがあると、けらけらと快活に〝私がそそっかしいのよ〟と好ましい空気をかもし出せる特技（？）を持ったお母様でした。

楽しそうな日々が二年続きました。

年長組になろうとしていた頃、重大なことを父兄である、或る医師から聞かされました。

医師としては言ってはいけないことですが、と前置きされて、「具合が悪い、といっているあの病気はガンなので、あと一年はもたないのです。お子さんの将来のことがあるので先生にだけお話しします」というのです。

寝耳に水、ということわざのあるのは知っていますが、心臓が、ドキン、と音をたてたように思いました。

それから私の苦しみが始まりました。

子どもの手を引いてにこやかに挨拶をしていく目の前の人に、これから起りかけている大変な不幸。

私の目はどうしてもその親子の姿を憂いのまなざしで見てしまいそうになるのです。その度殊に気を引立てて声を掛ける自分、とても切ない思いです。

或る老齢の高僧が、「死」というものについて人に語り、自身も超越したかに見えていた人が、自分の死期を知らされてからは……というような話を聞いたことがありますが、この類のことは先が分かるということも苦しいことだと思います。

目の前で可愛らしく動いている子どもに毎日毎日接しているのですから、そのことを忘れようと思っても忘れることはできません。胸が痛くなってくる思いで、よく庭の方に向って深呼吸をしました。

切りきずができたなら薬をつけてそれなりの処置もして上げられます。打撲ならひやしてはれをひかせても上げられます。けれどもどうにもして上げられないいら立たしさ、そのあとにくるであろうと思われる悲しみ。そのときほど手の届かない状態に苦慮したことはありません。

日はどんどんたってゆきました。

五月中頃にあった遠足のときも、まだ誰も知らずにその方を交えて喜々と話し合っていらっしゃいましたし、解散後も皆で座り込んでいました。あとで聞くと、つかれてしまって動けなくなってしまったので皆もおつき合いして口の方だけ動かしていた、ということでした。

遠足なども最後なのではないかしら、と思うと、じんと胸にこみ上げてくるものがあります。

その予想通り六月からは母親の代りに友だちの親がつれてきてくれるようになりました。

子どもに様子を聞くといともあっさりと、「ねている

よ」「病院にいるよ」という返事がかえってくることもたまらない気持でした。

子どもは病院にお見舞にいくことを嫌ったそうです。子どもにとって母親はいきいきとしているもの、美しいものなのでしょう。けれど病院にいる母親は自分の思っている母親とは余りに違うので、そういう態度をとらせたのではないかと思います。

私がお見舞にいったとき、「いやだといってきてくれないんですよ」という母親のことばを聞いて、私は何とか一度でもよけいに会わせて上げたいと思って、一緒に行きましょう、とさそってみましたが結局だめでした。本当にやり切れない気持でした。

夏休みに入り、ガンの症状が出たことや、まだ母親のところへ行きたがらないことなどを人づてに聞きながら私は仕事で沖縄に行きました。

すごく寝苦しい夜で、時がたつに従ってクーラーの音がひどく耳について、明日からへやを換えて下さい、と夜中にフロントへ頼みに行った頃、そのお母様はなくなったのでした。

次の朝東京からの知らせでその事を知った私は、その知らせを覚悟してはいたものの動揺しました。

文部省の現職教育の会でしたから、一緒に来ていた学校の男の先生（誰かに何か言いたい気持でした）に言いました。その先生はさりげなく、「そういうことはたびたびありますね。この間もうちの組の父親がなくなって……」と仰しゃいました。

考えてみますと学校位の年齢になるとそういうこともしばしばあるようになるのでしょう。こういう事は私が初めての経験だから、ということではなく、あの小さい人がこれから先いろいろなことに行き当るであろうことを考えると学校の先生のようにさらりとすごせる気分ではありませんでした。

＝つづく＝

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

私の幼児教育論（その二）

下山田裕彦

（一）

内村の高弟・矢内原忠雄（一八九三―一九六一）を通して、私が学んだ聖書の思想の中心を一言で言うならば、「救の連帯」と言ってよいのであろう。つまり、自分の救いには、他者の救いを前提するものでなければ、真の救いにはならないということである。

聖書の思想に触れるとき、確かに人は「自己充実」の喜びにひたることが出来るであろう。が、自己充実が持続し、真に徹底する為には、他者との共同の歩みや対話を必要とするのである。何故なら、人は関係的存在とも言われる通り、他者の存在を肯定し、前提条件としない限り、自分の存在はあり得ないからである。つまり、自己充実が真の充実である為には、他者の充実にまで及んでいかなければならないであろう。

倉橋の言う自己充実は、あくまでも自分の充実であって、その意味では根の浅い充実概念であったと言ってよいのではなかろうか。

静岡大学附属幼稚園（以下「附属幼稚園」とのみ記す）で、私が強く印象づけられることは、子どもの喜びや充実が子ども同志

の中で保障され成立している、ということである。つまり、子どもの自己充実は、複数の子どもの存在が必要なのである。このことは私の幼児教育論の出発である。

だから、幼児の教育が一人一人の子どもの自己充実を保障することから出発しても、子どもの成長発達にしたがって、他人への関心をもつよう働きかけることが他人の充実を保障することにつながるのではなかろうか。

附属幼稚園では幼児期の発達課題を研究テーマとして追求する過程の中で幼児期にしておかなければならないことは、

I　イ　他人へ依存している状態から自立して、自分で考えて行動できるようになる。

ロ　自分のことしか眼中にないような状態から脱して、他人の気持がわかるようになる。

II　ハ　衝動的、断片的にふるまっていたのが、意図的、組織的になっていく。

ニ　一面的にしか捉えられない傾向が少なくなって、多面的になり、場面に応じた言動がとれるようになる。

（『幼児教育のあり方を求めて』研究紀要一九七七年・十三頁）

と言う。

自分をいつも主人公とする人間同志が対決し衝突しあっている今日の社会の中で、自分の人生を自分の力で切り開いていくことの出来る人間が、同時に、他人の気持がわかり、他人と共に生きる人間であることは今日的課題であるだろう。私はこれを自立と連帯の思想と呼んでいるが、この二つにして一つの思想は今日の社会を生きるわれわれにとって最重要な思想と言ってよいのではなかろうか。

その意味で、私は附属幼稚園の実践を注意深く見守っている一人である。言うまでもなく、右に引用した幼児期の発達課題は自立と連帯の思想に支えられているからである。

私が今日このような考えをもつに至った要因の一つには矢内原を通して学んだ聖書の思想に触れたことにあるだろう。私はこのことをいつも心に留めて感謝の気持を持ちつづけてゆきたいと願っている。その場合、注意しなければならないことは矢内原の生きた時代と今日の時代は社会的背景も問題性も違っているということである。だから、最終的には自分の眼で、正しく聖書を読むということが出来なければならないであろう。私の終生の課題と自覚している幼児教育の研究が今日の社会の動きから遊離したり、観念的になったりしない為にも聖書のメッセージを正確に捉

える、ということが絶対に必要な作業である、と思っている。

（二）

私は前号で倉橋惣三に限りない親しみを持っている、と書いた。

昨年の保育学会の口頭発表から引用することにしよう。（於聖和女子大学）

「私には倉橋が一高在学中の若き日、内村鑑三の門をたたき、内村の人格的影響の下で、彼が幼児の教育と取り組み始めたという歴史的事実の中に限りなき親しみを覚えるものであります。つまり、私は倉橋を対象化できる立場に身を置きつつ、同時に、倉橋を内側から理解してみたいと思うのであります。換言するならば、彼の主張に虚心に耳を傾け、学ぶべきものを学び、激動する今日の社会の中で、倉橋の保育理論をどのように再評価すればよいのか、また、倉橋の保育理論をどう継承すればよいのか、という問題を考えてみたいのであります」

人格観念のきちっとした倉橋の保育思想から今日でも学ぶべきものは少なくはないだろう。特に、今日の社会にみられる人格観念の希薄さがいろいろなところで問題を複雑にしてはいないだろうか。

私が最近、身近なところで痛感していることを列挙すれば次の通りである。

一、権利だけを主張して、自分の義務を怠っている人

一、心情を無視して、筋道だけを優先する人

三、学問研究より政治的イデオロギーを優先させる人

例えば、このような人は著しく人格観念が欠落しているから、冷たく観念的であり、相手の立場を無視してはばからない。

このような人の保育研究とは一体なんであるのだろうかと、私は常日頃疑問に思っているから、ハートの細やかな倉橋の保育思想を、今日の社会の中で、批判継承することは大切な課題であると思っている。問題は聖書の思想に照らして、倉橋の著作を読み直すということであろう。つまり、倉橋の保育思想に社会的性格を吹き込むことではなかろうか。

附属幼稚園の教育目標の一つをもって言い直すならば「自分のことしか眼中にないような状態から、他人の気持がわかり、楽しくいっしょに生活できるようになる」と言うことになるのではなかろうか。

この教育目標は「ねらい」として次のようなことを課題として

いる。

○附添いから離れて、嫌がらずに幼稚園へくる（三歳児）——→○教師と親しくなり喜んで幼稚園へくる——→○仲良しの友だちがふえて幼稚園生活を楽しむ（四歳児）——→○相手のことがわかり喜ぶようなことをしてあげる——→○皆で力をあわせて幼稚園生活を楽しいものにしていく（五歳児）（『附属幼稚園教育課程』別表から引用）

倉橋の言う自己充実を出発としながらも年齢と保育年数が進むに従って、社会的視野が徐々に広がり、他人の気持がわかり、他人と共に力を合わせて幼稚園生活を楽しいものにしていく、という発達課題を研究成果の中から浮かび上らせている。

右に引用したねらいの一つ「皆で力をあわせて幼稚園生活を楽しいものにしていく」ということを、次のように言い直してみることにしよう。

○皆で力をあわせて家庭生活を楽しいものにしていく。
○皆で力をあわせて学校生活を楽しいものにしていく。
○皆で力をあわせて社会生活を楽しいものにしていく。

われわれの家庭生活の現実を直視するとき、そこには何と悲しみや憎しみが支配していることであろうか。一家の柱を奪われたり、重い知恵おくれの子どもの出生によって十字架を背負わされたりすることは珍しいことではない。

子どもの天分が引き出され、拡大されるところである学校生活には点数絶対主義が支配し、教師の力量は問われないで、子どもだけがバカ者扱いされたりしている。

力を共に出しあって、難問を解決していかなければならない社会生活は現実には権力者が弱者を踏みにじっている、と言ってまずまちがいないだろう。

それ故、共に生きるという連帯の思想の普及と浸透は家庭や職場あるいは社会において、今日ほど緊急の課題として要請されている時代はない、と言ってよいだろう。

（三）

私が矢内原忠雄から学んだ聖書の思想は、「救の連帯」である、と書いた。このことをはっきりと理解できるようになったことは最近のことである。長い間、矢内原の、あの激しかった戦中の戦いの根源にあるものは一体何であったのかと私は思いめぐらしてきた。また、同じ内村の門下生でありながら、倉橋と矢内原の太平洋戦争への対処の仕方が余りにも違いすぎていたその差がどこから生じてきたかを思いめぐらしてきた。

それは、保育学会でも度々指摘してきたように聖書の思想の受取り方に差があったのである。この問題を私はここでもう一度くりかえすつもりはない。ただここではっきりと指摘しておきたいことは聖書の思想を肯定し、受入れ、聖書の思想を生きる者は個人の意志を越えて公的使命を担う者とされる、ということである。このように書けばはなはだ傲慢なこととお叱りを受けるであろうか。

矢内原の生涯を一貫して流れている特質の一つは彼が公的使命を自覚していたことであろう。具体的にどんなことを意味するのか、東大総長退任の翌月、つまり昭和三十三年一月に記された「人生の転機」から引用しよう。

「私が大学を去るのは、自由と平和の理想が日本を去ることの預言的象徴ではないであろうか」

日本の平和と自由を守ってきた砦のごとき人間は矢内原一人だけだったのであろうか、という疑問が提起されても不自然ではあるまい。言うまでもなく矢内原は日本の歴史に大きな足跡を残した代表的人物である。このことを十分承知しつつも、右に引用した言葉から受ける印象は強烈である。

聖書の思想を徹底して生きる者は、いと小さき者であってもこのような使命を自覚するのでなかろうか、と私は最近考えるようになった。

このような徹底した公的使命を生きた矢内原の根底にあったものは強烈な罪の自覚であった。恵子夫人は晩年の病床の矢内原の姿も次のごとく描いている。

「けれども主人の戦いはそれだけではありません。主人には霊と肉との戦い、悪魔、罪との闘争がありました。それは病気の苦痛にくらべられない何倍かでございました。ある時、私が病院にまいりますと私の顔をみて涙を流しました。あの何者にも負けない勇者の主人が泣いておりました。かけ蒲団で顔をおおって泣きました」

これは深刻無比な世界である。私の存在が根底から音を立ててくずれていくような衝撃を覚える。

強烈な使命感と罪の自覚は二つにして一つである。

矢内原と倉橋を並べるとき、前者は植民政策を重視した経済学者であり、後者は幼児教育を専攻した心理学者である。だから、両者を比較検討することにはやや無理がある。にもかかわらず、両者の思想の内実を問うことは容易である。私はこの作業をやってみた。勿論、私自身の為である。

私の幼児教育論と題しながら、その基礎作業となるようなことを書いてきた。残された二、三の私の問題をスケッチしてしめくくりとしよう。

まず、第一に、保育実践から謙虚に学びたいと思う。つまり、子どもと直に接しながら子ども自身から学びたいと思っている。研究者の中には固定概念にしばられていて、固定的・観念的にしか子どもをみない人々が多いのではなかろうか。デスク・ワークをしながら概念操作による論理の組立てだけでは保育の実践は旧態以前の教師中心主義をぬけだすことが出来ないのではなかろうか。

第二に、保育内容に関わるテーマを一つ選んで実践してみたいと思っている。倉橋の言う「自己充実」が、「他者の充実」を保障することにつながっていくことが幼稚園の基本的課題ではないかという仮説を立てて、この仮説の真偽をたしかめてみたいと思っている。

私達の住んでいるこの世界はあくまでも相対の世界である。だから、自分の立場を絶対化することは厳にいましめなければならない。それにもかかわらず、特定の政治的立場から問題を提起したり、特定のイデオロギーを学問の場に持ち込んだりすることがある。これは明らかに真実を生命とする学問的精神への挑戦である。だから、この相対の世界に身を置きつつ、理想を理想としながら真実を真実としながら、人間と社会の悪を私は問題にしてゆきたいと思う。

尚、私的なことではあるが母のことを書き添えておこう。母の仕事を私が継承したことに見えざるものの導きを感ずるからである。

母が戦後、田舎で幼稚園を始めたのは私が中学生の時代である。長い間、無給で、小使いから園長の仕事まで一手に引き受け、苦闘していた日の母の姿を、私は今、その時の母の年齢に達していきいきと想い出す。大きな病気を二度もしながら一体、何が母を支えていたのであろうか。

その母は昨年暮、一人娘（姉）の死と対面し、悲しみに沈んでいた。

他ならぬ私が幼児教育を専攻することになったことを思う時、『私の幼児教育論』の根底にはこの母の無意図的な影響があったことを思って感激を新たにするのである。

＝了＝

（静岡大学）

のりの思い出

岩淵恵

祖母と私と弟。四歳頃のある冬の日。こたつの上には、色紙と大和糊。私たちは無心に和バサミの先で、工夫して折りたたんだ色紙に切り込みを入れていた。開く時のうれしさ、そこには思いがけない花型の連続模様があらわれたのだった。ね、おばあちゃん、見て。すてきすてき。京都弁でいろいろやりとりもあったろう。桃山の家だった。

色合いのよいもう一枚の紙に、レースをのせるように、模様をつけた紙を大和糊ではる。ボール紙の上で、うすく平均してのりをつけるのは、幼い指にはむつかしい事だった。

あつくぬったり、もたもたしたりすると、切り目からのりがはみ出し、色紙のきれいな色がにじんでしまうのだった。ひやっと指に冷たい大和糊、それがすこしあたたかくなり、ボコボコしないよう、上から紙で押しながらぴっちりはれた時のうれしさ。ね、おばあちゃん、見て。すてきすてき。

何枚か出来た頃、祖母が立ち上る。どっこいしょ。さあ、はりましょう。はりましょう。私や弟が遊んで穴をあけた、ふすまや障子に、色紙で修理をするのだ。

色合いを考えて、又ていねいに大和糊をぬる。背のびしてはる。どっこいしょ。祖母は私たちが背のとどかない所に、腰をのばしてはってくれる。着物の袖でのりをふいてはいけませんよ。ね、おばあちゃん、見て。メミちゃんの作ったの、すてきすてき。オクのもチュテキチュテキ。三つの弟はボクと発音出来なかった。私のことはお姉ちゃんと言えないのでオテーチャンだった。オテーチャンのもチュテキ。祖母は私たちが下手にはってもニコニコしていた。ね、おばあちゃん。

夜になると、電燈をつけて、四つと三つのあねおととは、夢心地で、自分たちの作品にみとれるのだった。

†　　†

なめられる「のり」となめられない「のり」があるのを、幼い頃、よく知っていた。

祖母や、母が「決してなめてはいけません」という「の

り」は、大和糊とアラビア糊で、父の机にある、神秘的な、透明なみどり色の、三角形のアラビア糊は、子どもが使ってはいけませんと言われた。きっと遠い、アラビアという国から、海を渡って来たのにちがいない。父は、あれで何をはるのだろうと思った。時々、そっとさわって見た。今でも、ロマンチックという言葉を聞くと、何故か、あの透明なみどり色のガラスびんを思い浮べる。心の棚にのっているのだろうか。

シタキリスズメ、オヤドハドコダと、一年生の国語の時間にならった。そこには書いてなくても、舌切雀が、おばあさんの作った糊をなめて、チョンとハサミで舌を切られたことは知っていた。

勿論、ハサミは和バサミで、祖母や母の裁縫箱にあるのと同じものだと思った。ナメルトハサミデチョンギルゾ。チョキン。

勿論「のり」はなめてみた。メリケン粉を水で溶いて、おしゃもじでかきまぜながら煮る。祖母の手もとを見ていると、平鍋の水が半透明にトロリとしてきて、大きな泡が一つ二つ出て来る。アーブクタッタ、ニータッタ、ニータカドーダカナメテミヨ。と口ずさむ頃、火をとめる。

障子張りの時は、この糊を使う。祖母は少し余分に作って、すこしお鍋に残し、お砂糖を入れて、小皿に入れてくれた。

それでもう、私も弟も舌切雀になってしまう。チュンチュン。のりをなめちゃった。ナメルトハサミでチョンギルゾ。チュンチュン。もう二匹の雀は夢中になってしまう。お皿をなめてしまうと、羽をはやして家中をとびまわる。たちまち、おばあさんと、おじいさんに化ける。タンスから着物や風呂敷をとり出し、押入れから行李をひき出し、おもちゃ箱はひっくり返す。大きいつづらがほしいのよ。おぶい紐でしょおうとする。力足りずひっくり返る。たちまち行李の中にもぐり込み、お化けとなって出なくてはならない。

スズメガノリヲナメチャッタ。チュンチュン。ナメルトハサミデチョンギルゾ。チュンチュン。シタキリスズメオヤドハドコダ。

あ、メミちゃん、あ、ツネちゃん、そんなにさわいではいけません。ふすまを破いちゃってまあまあ。オバアチャン、ゴメンナサイ。

（お茶の水女子大学附属図書館）

糊

堀合文子

〝この頃の子どもは糊を使いませんね〟〝糊を使わなくてもよろしいのでしょうか〟〝なぜ、糊を使われないのですか〟〝糊を使われないのは何か意味がおありになりますか〟〝家の子はセロファンテープばかり使っております〟

こんな質問や会話が聞かれるようになりました。制作すれば糊と鋏と紙は欠かせないものだったのが今は殆んどかえりみられなくなってしまいました。

私は此処でセロファンテープはこの様に、そして糊はこのように使えばよい、糊の使い方も決めた指で……と、細々と説明するのは簡単で、考えようによっては必要かもしれない。しかし、これだけ時代がすぎて来たので、今の子どもたちは私共のイメージのセロファンテープや、糊とは、おそらく違った考えを持っているのではないでしょうか。

私も事実、セロファンテープばかり使って、出来たところもべたべただし、この所は糊でした方がきれいにできるのに……と、思った事は何度もあり、そして安易についてしまうセロファンテープばかり使って、糊がついてくれる、あの待つ心、辛棒する心、何度つけてもはがれてしまう、それでも又つけるあの気持。これは困った、どうしたものか、年齢がきたらまた糊を使わせてと、いろいろ思案したものです。

ここで糊だ、セロファンテープだと論ずるよりも私はこの頃思う事は、この糊のように次々と時代は流れ、今はセロファンテープ以上によいものも一杯ある。そんな時代に生まれ、成長し、生活している幼児たちで、私共がとかく昔のよさや郷愁かにこんなものもあった、こうであったと反省を混えながら考え、たしかに前の方がよいものも捨てられないものもある。しかし、一年経つと、もう変っている、あらゆるものが進歩している、たとえ昔のものをとり入れても進歩はしている。そんな時代に私はやっぱり前へ進むべきだと思います。

あのお子さんたちが成人し社会に世界に活躍する時は、もっともっと変っているにちがいない。糊をつけてじっとかわかしてと待ったりする所ではない。セロファンテープですぐはりついてしまうどころでもない。

そんな時代に生き、社会で活躍しなければならないあのお子さんたちにどうしておいてあげたらよいであろう。もっともっと進歩した文化を処理できる能力、処理できるだけでなく更に更に進んだ文明を生みだす力、それを持ってもらいたいではありませんか。そして、その能力だけでなく世界を一手に泳ぎまわるための人と人、人類と人類との和をたもつ精神力と心。新しいすべての事柄が待っているので、糊は、セロファンテープは、等と、狭い所で幼児をみつめていては幼児がかわいそうではないでしょうか。セロファンテープを使おうが、糊を使おうが、私はどちらでもよく、もっと大きな見地から幼児をながめ、そして考えてゆかないと、幼児の中に躍動している未来への偉大な原動力はみんな保育者のために、しらないうちにつぶされてしまってはいないでしょうか。

一つ一つの事、一人一人の幼児は大切にきめ細かに世話もし、考えもしなければなりませんが、これを使ったから、この頃は使わないからなどでなく、じょうずに言えませんが、もっともっとお子さん一人一人の中にあるあの力、神様から授かった力でしょうか。それをぐーんと伸張させる事を考えたらどうでしょう。

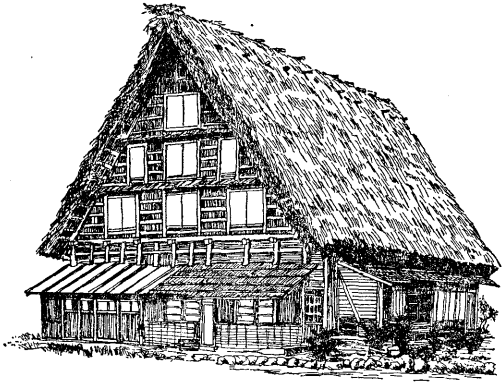
それには、保育者の一言一句、一挙一動をもう一度反省してみて、お子さんが聞いてくれたから、自分にむいてくれたから、やってくれたからという意識より、もっとお子さんの中の力を活動させる事を研究したらどうでしょうか。いくらあそんでいるようにみえていても創造性を次々とつぶしている保育者もあります。小さい事を大切にしながら、大きいお子さんの中の力を引出しましょう。現代のお子さんはたしかに変化してきて前のようにはいきませんが、私は何か現代として変化しただけに将来にむけての偉大な力がひそんでいる気がしております。

糊を使っても、セロファンテープでも、他のものでも、使ったもので幼児が何か少しでもプラスになってそのお子さんの中に育ってゆくように先ず考えていったら、日常の生活の一つ一つが大切にされ、その中で成長してゆくでしょう。糊も大切、セロファンテープも大切、何もかも彼らにとっては大切なのでしょう。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

木材をつなぎ合わせる

山本　孝



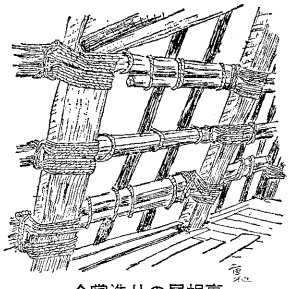
飛騨の合掌造り

木材を使って、建物、箱類、道具、桶などいろいろのものを組立てていくとき、木材をつなぎ合わせなければなりません。その方法は非常にたくさんあります。

縄やひもなどでくくり合わせる

紀元前三千年頃のエジプト遺跡から発見された土版文書などによると、芦の茎を束ねてくくり合わせ、籐椅子のようなものを作っている様子がわかります。このように〝ひも〟のような材料で木の棒などをくくり合わせて木材を組立てる方法が一番早く発達したようです。日本でも、有名な飛騨の合掌造りはマンサクという木の皮や、フジヅルや、なわでしばって作られています。

樋や樽は細長い板で下方が少しせまくなった板片を何枚か



合掌造りの屋根裏

並べて、竹を割って作った〝たが〟をはめ、つぎに底板をはめ込んで、たがをしめて作ったものです。これも木と木をつなぐうまい方法です。風呂にもこんなのがありますね。

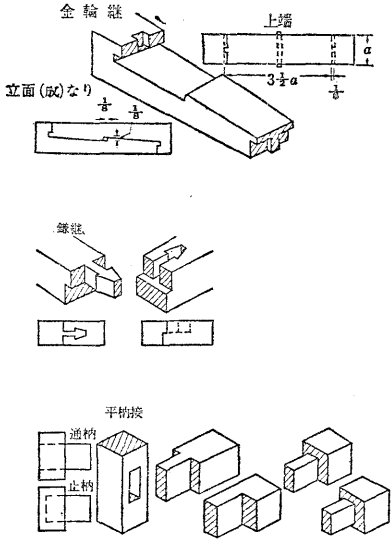
接手でつなぐ

木の棒や板をつなぎ合わせるのに接手(つぎて)があります。精巧な細工で昔は大工も指物師も建具師もそれぞれに必要な技法を習って一人前になったわけです。

家を建てるとき、柱をつなぐには金輪継（かなわつぎ）をはじめたくさんのつぎ方があります。桁（けた）は鎌継（かまつぎ）など、柱と梁（はり）をつなぐ枘接（ほぞつぎ）などが適所に使用されるわけです。

この方法は前に述べた〝なわ〟でしばる方法と共に、特に日本で使われてきました。地震や台風、積雪などの自然の力に強いのです。最近建てられている高層ビルは、つなぎ目に工夫がしてあり、ガッチリと固めてありません。固めてしまうと力が加えられたときに材料の一部に力が集中して破壊されてしまうからです。日本の古い工法が、なわでくくりつけたり、接手で引っかかっているだけに見えますが、最近の細かく計算された工法と、どこか似ていて面白いのです。

板も接手でつなぎます。代表的なのは蟻矧(ありはぎ)で、平面的に横につなぐ方法です。直角につなぐ組接手（くみつぎて）には石畳（いしだたみ）接手があり、また仕上ってしまえば組接手が全く見えなくなる隠蟻接手（かくしありつぎて）などがあり、この方法で高級な箱や調度品が作られてき



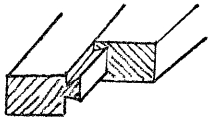
ました。

接手の種類は百種類以上もあり、昔の名工はどうも〝のり〟を使わなくて大丈夫な方法で高級品や日用品を作るのを得意にしていたようです。

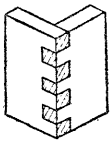
釘や金具でつなぐ

釘、木ねじ、ボルトなど金属製のものでしめつける方法です。古くは約千三百年前に建てられた法隆寺の五重塔の中心柱の補強に鉄製の大きい釘が使われていました。釘には鉄だけでなく、銅釘、真鍮釘もあって、使われる場所によって適当に選ばれます。また小箱などには竹釘が使われます。竹を削って作り、植物性油で煎って固くして使います。

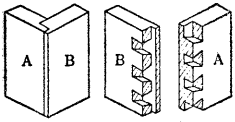
蟻　矧



石畳組接



隠(かくし)蟻組接



〝のり〟ではりつける（接着）

木材をのりではりつける方法も非常に古くから使われてきました。

澱粉糊　ご飯粒をよくつぶし、適当に水を加えて練ったものを〝そくい〟といい、木をつけるのによい糊です。また、もち米から作った寒梅粉があり、湯でといて使います。今でも琴のような細工に使われています。そのほか小麦、じゃがいもなどの澱粉類も木材接着に使用できます。

澱粉糊は木と木との接着のほかに、木と紙(例えば障子紙)との接着に使います。この場合は張かえのとき、簡単にはがれてほしいのです。澱粉糊は水でぬらせば簡単にはがすことができます。人間は勝手なもので、障子紙がついている間は、はなれては困る。しかしはがしたいときはすぐはなれてほしいのです。切手マニヤが記念切手をはがすのと同じことですね。このような目的には澱粉糊は都合がよいのです。

澱粉以外の植物性のものにはアラビヤゴム糊が有名ですし、こんにゃく糊もあります。

にかわ　動物の皮や骨から得られる蛋白質から作られたものです。にかわを精製したのがゼラチンです。温湯で溶かして使いますが、木材の面をよく温めてにかわをつけて接着します。温度が下ると一寸引っぱっても離れない程度に固まります。その後にかわに含まれている水分が完全にぬけると接着が完全になります。もしゆがんでつけてしまったら、完全に水分がぬけていないうちでしたら、あたためて軽くたたけばはなれるのでやりなおせます。

バイオリンや楽器を大量生産するには今では合成樹脂接着剤を使いますが、高級品はにかわを使います。合成樹脂は一度固まると、もうもとのどろどろした形のものになりません。したがって合成樹脂ではりつけたものは一回限りで、修繕が困難です。澱粉糊やにかわでつけたものは、接着がはがれたときは修繕できるわけです。

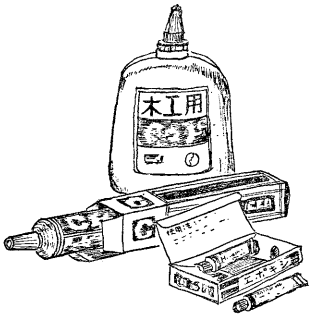
なお、海産動物から得られるにかわのことを〝にべ〟とか〝にべにかわ〟といって、非常によくつくうえに、固まってからも柔軟性があるので、弓を作るのに使われています。

蛋白質系ののりに牛乳からとったミルクカゼインのりがあります。合成樹脂系ののりができるまでにはよい接着として使われ、昔の木製飛行機もほとんどこののりを使いました。

合成樹脂接着剤　今から約七十年前、石炭酸系の合成樹脂のベークライトが発明されました。それから後、色々の合成樹脂が次々に作られて、今日の合成樹脂時代になりました。

合成樹脂接着剤には石炭樹脂の他に尿素樹脂、メラミン脂樹、ポリエステル樹脂、酢酸ビニール樹脂、塩化ビニール樹脂、エポキシ樹脂、合成ゴムなど非常にたくさんの接着剤があります。

合板　合成樹脂のおかげで合板（ベニヤ板といわれている薄板を糊ではり合せたもの）の耐水性がよくなりました。今までにかわなどで張合わせていたものが、耐水性の強い合成樹脂で張合わせるようになったからです。現在南極の日本の観測基地に使われ、また大平洋を単独横断したヨット、マーメード号も、この



酢酸ビニール
エマルジョン接着剤
など

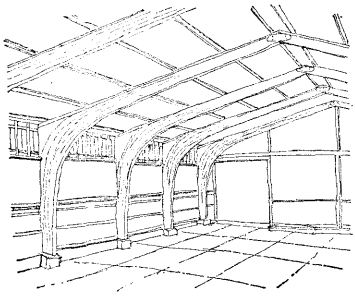
セルロース系
合成ゴム系など

二液式
（エポキシなど）

合成樹脂で張合わせた合板が使われているのです。

木材や合板の性能について、日本農林規格（JAS）できめられています。合板ではヨットに使うような完全耐水性のを第一類、多少の湿気に耐えるのを第二類、室内で全く湿気のないところで使うものを第三類というようになっています。それぞれの性能にあうように接着剤を選んで合板が作られているのです。

集成材　二センチから三センチメートル程度の厚さの板を何枚か張合せて太い木材にしたものを集成材といいます。柱や梁に使っても大丈夫です。大径の木材が少なくなった北欧のスウェーデンなどで発達し、今では世界中で使われています。



集成材を使った工場

木材の接着　一般に木材を接着するときは、よく乾かしておくこと、そして油などでよごれていないこと、接着する面を平らにしておくことです。木材は方向によって性質が異なっていますね。木口面と木口面はどんな糊をつかっても、まずくっつかないと思って下さい。そのほかの方向ではよくつきます。

木材と金属、タイルなどとの接着にはエポキシ樹脂系の接着剤でよくつきます。

家庭で便利な接着剤　いろいろの接着剤がありますが、工業的に都合がよくても家庭では使いにくいのもあります。近頃は文房具店や材料店でチューブ入りの接着剤を売っているのでたいへん手軽で便利です。しかし残りご飯をかまぼこ板の上で練ってそくいを作って使うこともたいへんに有用です。市販の接着剤を使うときには、目的と接着剤の種類とをよく考えて下さい。そして使用法をよく読んで使って下さい。

うまくつかなかったとき、澱粉糊やにかわはやりなおしができますが、合成樹脂系のは一度かたまると膜ができてしまうので、同じのりでも、また別ののりをつかってもつけることがむずかしくなります。このときは木をけずるか、サンドペーパーをかけるかして新しい面を出した方がよいことなども覚えておいて下さい。

子どもの活動と保育空間（その一）

堀井仁子

赤塚保育園への転勤（スペース保育の動機）

「あれ!! うその園長先生だぞ!!」

「ヘーンナノー」事務室の入口からものめずらしそうに、私を眺めては、口々に感想を述べあっている子ども達。転勤してまだ十日もたっていないこの赤塚保育園で、事務引継ぎに一生懸命で、そして、子ども達の顔も名前も、まだおぼえていない私に、遠慮のない声をあびせかけて来る。

「クチョババー!!」と、言って逃げて行く子ども。

「ドッカラキタノ？」と、まるでめずらしいものでも見るように……。

みんな何とかして、自分達との接触のきっかけをつかもうと、しきりにデモンストレーションして来る。これでは、事務室に引込んでいるわけに行かず、保育室へ……。

ワァーッと群がって来る子ども達の活気は、それまで勤務していたマンモス団地（高島平団地）内の保育園での子ども達とは、随分異なった新鮮な活気が伝わって来る。

昭和四十九年四月のことだった。それをきっかけに子どもと一緒にあそぶ中で、観察をし、クラス担任をしないフリーな立場の客観的な見方をするよう務めた。

そういう目で見ると、実に生き生きとした子ども達であり、新しいものへの興味は、すざまじい程で、いろいろなものへ目を向けて行くことの出来る子ども達であることを知る。

ところが、良く見ていると、いろいろなものに、すぐに飛びつくが、長続きがせず、物を深めて、考えてゆくことが、まったく

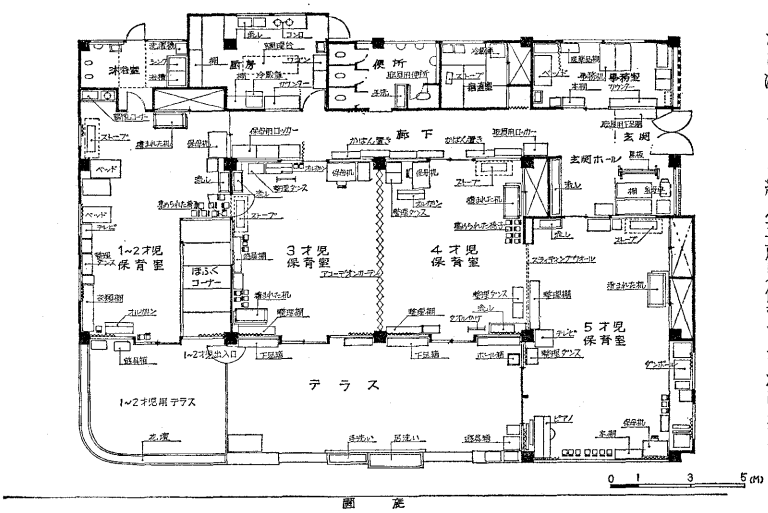
不得手であり、自分の要求・感情をむき出しのままなのでトラブルが多い。例えば、バラ組（四歳児保育室）を通り抜け、廊下を通り、さらに、さくら組（五歳児保育）をかけ抜け、テラスに走って行く子ども達をよく見かける。その通路であそんでいる子ども達のあそびは、妨げられ、そこで中断されてしまう。

良い面を、いっぱい持っていながら、それが打ち消されてしまう事が多い。何故だろうか？

当時の赤塚保育園（図—1・表—1）では、他のほとんどの保育園がそうであるようにひとクラス、ワン・ルームで保育が行なわれている。食事も、午睡も、すべての保育活動（戸外あそびを除く）のデイリー・プログラムはワン・ルームの中で運営されていた。

一斉保育で、ゲームあそびをしたあと、机を出して食事。終ると、机を片寄せて、午睡の準備等。一日に何回も、言わば必要以上に、机が出し入れされる。（近頃の机椅子は、そのために、積重ねられるようにもなっているが……）

その都度、子ども達は、場所が作りなおされるまで、片隅で、待たねばならない。



図—1　赤塚保育園平面図

表—1　定員および人数構成

	1才児	2才児	3才児	4才児	5才児	Total
乳幼児	8人	8人	16人	18人	18人	68人
保母	2人	2人	2人	1人	1人	8人
その他	用務員1名, 調理士2名, 園長1名, 嘱託医1名（非常勤）					

待つことも大切だが、毎日の生活の中で、これ程、待つことの多い生活は、その分、子どもの活動時間が少なくなって行くのではないだろうか。

子ども達の家庭環境も、ひと間のアパート生活者が多く、子どもの安住する〝場〟の確保は望めない。保護者会で「うちの子は夜、寝るのが遅くて困る」との発言がしばしば出る。話を聞いてみると、一日の仕事を終えた父親の唯一の楽しみは、テレビを見ながら、一杯やることだと言う。その傍のふとんで寝る子どもは寝れる訳がない。

何とかして、子ども達が、落着いてあそべる場所を作るわけにはゆかないだろうか？

現状の狭い保育室では、いかんともしがたいが、せめて、絵本を読んだり、テーブル・トイで遊べる場所の捻出は考えられないだろうか？

そんなことを考えつづけている折も折、建築家の卵で「保育空間」について、研究をしている坂本さん（当時、日大の大学院で建築計画を専攻、現在、神谷・荘司計画設計事務所に勤務）と知り合った。

建築家と知り合う

彼は、……

「〝保育〟とは、一、二が保育者自身で三、四がなく、その次が、設備・備品なのだろうか？

そして〝保育空間〟とは、保育を進める上で、必ずしも重要なものではないのだろうか？

ぼくは、この考え方に疑問を持ち続けています。もちろん、保育は、保育者の適切な誘導がなくては、成立しないという大前提の上でのことです。

良い保育空間で、適した設備・備品の手助けがあってこそ、より良い保育がなされるのではないかと考えています。

訴えたいことは、空間の質によって、人間の心理が、いかに潜在的に多方面に渡って影響を受けていくかということです。

その上、建築的に研究が行きづまっているのが、保育空間を含めた〝子どもの空間〟の分野ではないかと考えています。それは、保育空間を研究する建築家の少ないこと、それに加えて、現場の保母さんや保育学者の保育空間に対する意識や、要望などが、少ないせいではないでしょうか。

保育空間をもう一度みつめ、少しでも、より良い保育を進めてもらいたい」

という考え方を強く持っている。私も、少なからず、彼の持論に共鳴するところがある。

職員会議開かれる

しかし、限られた、現状の保育室を、最大限活用し、保育に生かしてゆくには、どうしたら良いだろうか？　ということで、職員会議に提案し、討議が行なわれた。

職員会議の出席者は、保育者側から、園長（堀井）・主任（平沢）・保母（森・高橋・畠山・高山・信松・杉山・金子）。そして、建築側からは坂本さんであった。

園長「今日は、これまでの保育反省会の中で子ども達が落ちついて考え、行動が出来ないのは何故か？　ということについて、話し合ってみたい」と提案する。

森　「とても活動的な子ども達が多いから良いと思っているわ」

畠山「そうね、元気はあるし、だけど、絵本など見ていても、すぐにポイッて放り出して別のあそびに移ることが多いのよね」

高橋「結局、子どもって、動きまわることが好きなんじゃないかしら？」

畠山「でも、活動的なあそびでも、長つづきがしないし、すぐにあきてしまうのはどうして？」

主任「毎日の生活が、細切れすぎることに、一因はないかしら？例えば、積木をしていても、ほかからの邪魔で、せっかく、積み上げた積木をくずされてしまい、何度か繰返すうちに、あきてしまうとか……」

坂本「ですから、保育室の形態を変えてみてはどうかと思うんですが。これまで壁ぎわに置いてあるロッカーや本棚を保育室の中に移動させ、いくつかの活動空間を作るのです。落着いて絵本をみたり、ブロックをしたりする活動空間を確保して無性格な保育室に性格付けをしてみてはどうですか？」と、実験保育を提唱する。

保母達は、実験保育という試みに対して、非常に強い拒否反応を示す。その表われとして、

高橋「保育室が大きく変わることは、子ども達が動揺するし、良い方向に向くとばかり限っていないので賛成しかねるわ」

森　「私もそう思う。毎日の生活の中でだって、努力してゆけば良い方向に向けられるもの」

新しい提案に、不安と抵抗を示す保母達の中から主任の発言があった。

主任「やってみなければ、わからないでしょう。そのためには、十分考えて、良い方向に進むように、準備してから始めましょうよ」

高橋「でも、子ども達は、実験台にされるわけでしょう。モルモットではないんだから……失敗は許されないんだから……」

園長「ねえ、いつか茂ちゃんが、粘土ベラを取りに行き、自分の机に戻る途中、走って来た友達とぶつかって、ほっぺを突き、二針、縫ったことがあったでしょう。もしも、手近な所に、粘土ベラがあったらあんな事故を起さないで済んだかも知れないわよ」

畠山「そうね、そう言えば、保育室の床の上に、絵本がちらばっていても、平気で、ふんで歩く子どもを見かけるけれど、注意するだけでなく、絵本の置き場所や読む場所を私達が考えなおす必要があるわね」

主任「とにかく、私達もう一度、まわりを見まわして、考えなおすことが必要なんだから、一回だけでも、やってみてはどうかしら」

保母「そうね。……」

ということで諸手を上げて、と言わないまでも、保育空間について、考え、話し合いを進めることに徐々にではあるが、保母達の気持は、動きはじめ、その後、何回かミーティングの場が設けられた。

制約の多い中で

ところで、赤塚保育園は、公立（東京都板橋区立）のため、予算についても、一園だけ特別なものは、組むことが出来ない。本来ならば建築的見地から、調査、およびアドバイスをしてくれることになった共同研究者の坂本さんが園内に立入ることすら簡単に許されない。私達が、「何故保育空間を考えるようになったのか！　どんなことをしようとしているのか！」を板橋区の保育課長に子どもの流れ図等の資料を持って、説明に行き、理解を求めた上で、許可を得た。

しかもその上、特別な予算はいっさい組めないこと、そのために、子どもがけがをするなど、事故が起きたら即、中止という約束のもとに、実践を許された。

スペース保育の実践へ

建築家と合同の第一回職員会議で「十分、考え、準備した上で、とりあえず試みてみましょう」ということで、クラス別のスペース保育を行なうことが決定した。しかし、単に子どもたちが、実験台のモルモットに終らないよう、実践のためのミーティングを重ねた。

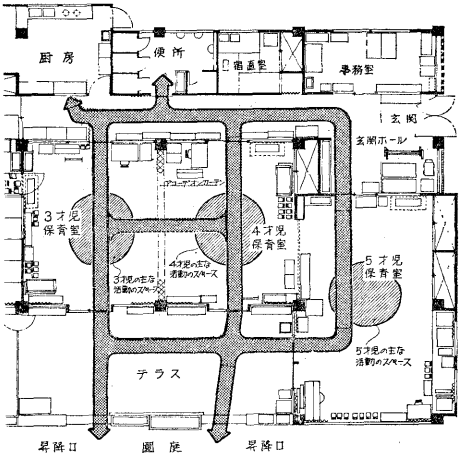
ミーティングでは、坂本さんから、子どもの流れ図（図―2）や、スペース保育以前の保育室の使われ方のデータ・シート（一例として三歳児保育室の図をかかげる　図―3）の説明を受けた。そして、「建築家による保育室」という御仕着せを脱するため、坂本さんのいくつかの試案を参考に、担当保母が、それぞれ、間取り図（図―4）を書くことになった。

短い期間ではあったが、一週間後に、それぞれが持ち寄り、坂本さんから、採光や広さなどアドバイスやチェックを受け、ディスカッションをした上で配置を決定した。

その結果設けられた活動空間は、三歳児保育室の場合、図―5に示されているように、午睡のスペースを確保した上で、まず以前から子どもたちが、落ちついて活動していた場所に、ホーム・*ベースを設け、次に、子どもたちが、良くあそぶ、ごっこあそびのためのスペースを配置した。

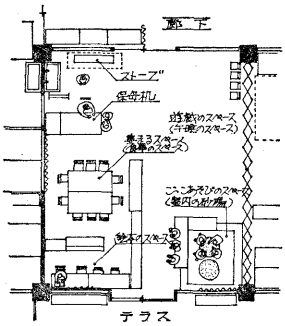
ホーム・ベースとは、小さな活動空間で、「ここは私の場所よ」と心の安定を与え、いつでも自分の〝場〟が固定しているように考えられたものである。そして、ほんとうは、椅子などには、個人の座ぶとんなどで、変化をつけたかったが、予算上、いかんともしがたく、やむなくあきらめ現状の椅子をそのまま使用した。

また、ごっこあそびのスペースは、絵本棚や遊具棚で、他の活



図―2　子どもの流れ図

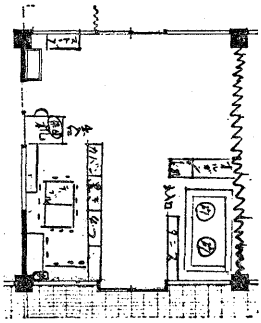
赤塚保育図での子どもの流れ・動きを示したもので，上図は3～5歳児保育室を中心として考察したもの。一般的な動線図とは異なり，子どもの動く主たる道筋を直線的に図化している。この図によると，活動の場と，移動のための道筋とが不必要に交差している様子がわかる。



図―5　スペース保育

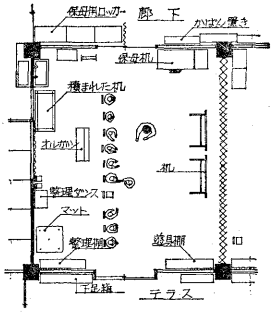
S.50. 3.12.　AM 9：40

朝の自由あそび。保母は保育室全体を見わたせる所に位置し，子どもたちはそれぞれのスペースであそびをはじめようとしている。活動空間はごっこあそびのスペース（午睡のスペース），砂あそびのスペース，集まるスペース（食事のスペース），絵本のスペースなど。



図―4　保母による間取図

縮尺1/100図面に，データ・シート，試案等をもとに，日頃子どもたちが落ちついて活動していた所に保母の希望する活動空間を保母自身の手によりかいたもの。梅雨時であったため，室内での砂あそびの場が試みられている。



図―3　三歳児保育室

S.49.6.14.　AM. 10：10

朝の体操の後，それぞれの保育室に子ども達が集まり，保母の誘導のもとに，一斉保育がはじまる。オルガンと，ねかされた机とが利用された保育（整理されたデータ・シートより）

動空間と仕切り、カーペットなどを敷いた。ブロックやママゴトなどを手近に置き、すぐに出してあそべるように、配置した。

壁を背にして置くように作られた家具が、子どもがもたれたくらいで倒れたりしないよう、家具の大きさや凸凹をできるだけ揃え、足元をガム・テープで固定し、かつ、家具同士がガム・テープで連絡し、安全対策を十二分に施して、翌日を待った。

（つづく）

（板橋区立弥生保育園）

＊　ホーム・ベースは、一九六六年イギリスで発表されたプラウデント・レポート（Children and their Primary School）のモデル校として設計されたイブリン・ロー小学校の内にある活動空間。

他の文献では、quiet room と呼ばれている。欧米との教育制度等の違いにより、現在では坂本さんによる活動空間の分類では、「集まるスペース」としている。

北国だより

白鳥美智子

上野発の列車が東北線、郡山駅付近を通り過ぎるころ、進行方向右側の車窓遠くの山なみの奥に、ひときわ優雅な山がみえます。その山容から、この地方ではひろく「田村富士」と呼ばれる、なで肩の美しいこの山は、片曽根山といい、私どもの町のほぼ中央にあって、町の象徴的な存在でもあります。

〃田村〃は郡の名でありその起源は遠く坂上田村麻呂にさかのぼるということです。藩政時代になって私どもの町―船引町（旧片曽根村）―をふくむ田村郡は、三春藩領となり、藩都はそれに先だつ古い時代から〃小さな城下町〃だった隣町の三春が、ひきつづき受け継ぎました。

三春という名の起こりがいつごろかはさだかではありませんが、その意味は「三つの春」で、春をあらわす三つの花―うめ・もも・さくら―がこの地方では同時に、いっせいは咲くところに由来しているといわれています。

きびしい寒さに耐えて、暗灰色の表情をみせていた野や山に、三月も半ばを過ぎてから微妙な変化が現れはじめ、日ごとに薄紅色や薄緑色が濃さを増して頂点に達する四月中、下旬ごろ、平地に、田村富士に、そして女王の足もとにひざまづいているような阿武隈の山々のいたるところに、春の花々がいっせいに開くのです。

それは、開演の時が満ちて、いまや充分に待った観客の前のどんちょうが重々しく上がり、舞台に居並ぶ名優達のあで

やかな姿に一瞬かたずをのむ、あの光景にも似ています。北国の自然の、回り舞台のフィナーレが秋の風物とすれば、春のそれには、幕あけの華やかさと歓びと期待とがあふれています。

平地では三春町の、樹齢千年をこえ、根回り一一メートル余の紅枝垂〝滝桜〟を筆頭に多種の花が妍を競っているのに、山では、山桜を初め、山つつじ・こぶし・山吹など、中に太古から細々と生きつづけ、春のごく短い間だけ、人眼につかない山ひだにひっそりと咲いては、再び翌春まで茂みの中に身を隠す、もはやその名さえ記憶されることのない花々が、つつましやかに懸命に咲く姿にはいいしれない感動をおぼえます。

山の花々の中でまっ先に散るのは山桜でしょうか。青葉、若葉のイニシァテイブをとるのも山桜のようです。花びらを落としきらないうちに、もう葉を出し始める気の早さです。すると、誘われたように木々は緑の装いを競い合い、六月にはもうすっかり新緑で身を包んでしまいます。

裏磐梯や安達太良、吾妻連峰などの深い山の中のカラマツの分厚い原生林が、澄明な大気の中で新緑の黄緑色からしだいに深緑へと変っていくありさまは、息をのむようなすばらしさです。

北国の春は気ぜわしいのです。そして盛りだくさんなのです。冬という舞台の暗転にあまりに長く足止めされ、じりじりしながら出番を待ちこがれていたせいなのでしょう。幕が開くと、惜し気もなく最高の見せ場を次々と披露してくれるのです。ですから北国の春は盛りだくさんなのです。

山では草木だけでなく、鳥や動物たちもとても多忙です。いろいろな鳥たちの声で、山はオーケストラのリハーサルの時のようなにぎやかさです。なにしろ今のうちに巣をつくり、卵をかえしてひなを育てなければならないのですから、彼らの身になってみれば、とても悠長になどかまえていられないのです。

真冬の寒い穴ごもりの中でお産をした母熊は、山に食物が豊富なので、人眼につかない山奥深くで子熊を連れ歩きながら、あれこれ教え育てていることでしょう。そして、山の麓では、幼稚園の先生が入園間もない子どもたちを連れて、花と新緑の山野を歩きまわっているのです。

（福島・わかくさ幼稚園）

ニューヨークの中の日本人（その二）

――子どもの世界――

佐藤奈美子

危機きたる

こうして順調にスタートしたのですが、二、三か月が過ぎる頃、だんだんおかしくなって来ました。ナーサリーはいやがらずに通っていますのに、家に帰って来ると、訳の分からぬ無理を言い、すぐ泣きわめき、乱暴するという訳です。いろいろな事が重なり合っていたようですが、中でも言葉の壁が大きな原因でした。

今までは何も分からなかったから「英語じゃ分からんョー」で済んでいたものが、なまじっか分かりかけて来ただけに、分かるような、分からぬようなでいらいらしたのではないかと思うのです。ナーサリーから帰って来た時、テレビを見ている時、「フラワーって日本語で何て言うの」「カインドってどういう意味」とよく尋ねられました。返答が彼にとって納得出来るものであればよいのですが、的はずれだとひっくり返って泣きわめくのです。彼の発音を聞き取るのがむずかしい事もあれば、同じ発音でもいろいろな意味を持つ語ありです。

ある日、ナーサリーから帰って来た彼「マイフレンドってどういう事？」と聞きます。「ぼくのお友達」「私のお友達」、とうとう辞書まで引っぱり出して来てあれこれ答えるのですがどれも「ちがう！」揚句の果て、「ママってどうして何も知らない

の。ママの知らんべー」と大泣きです。その日も夕方になってふと「ママ、マイフレンドってね、いじめちゃだめってことだよ」と言うのです。きっと、いじめられている子どもをかばっている光景の中で、「マイフレンド」と言う言葉が耳に残ったのでしょう。その言葉の使われた状況までをも、とっさに判断しろと言うのですから、辞書は全く役立たず、私まで泣きたくなるような毎日でした。

この頃には、よくさそいに来てくれる男の子もありました。遊びたくて出て行くのですが、しばらくすると「英語分からないからいやー」とべそかいて帰って来てしまいます。

こんな状態は冬の間中続きましたが、ナーサリーを休むことはありませんでした。そして家の中では、真由美達の遊びに加えてもらうと英語も口から出るようになって来ました。この頃の英語は、まだ自分でも日本語に置き換えられる簡単なもののようでした。

春になって、再び外へとび出すようになった時には、このいらいらもずっと下火になり、自分から友達に話しかけ、遊べるようになって来ました。

同じように英語はゼロからスタートしても真由美はすぐに気の合う友達ができ、一句一句そんなに深刻になるよりも、遊びそのものに夢中で英語にとけこんで行きました。片言から始まった貴宏も、二年後にナーサリーに通うことになりますが、浩史のような問題は全く起こしませんでした。

浩史英語の国へ

六月にナーサリーを終えた後、夏休みにはデイキャンプに通い、九月からは公立のキンダー・ガーデンに入学しました。このキンダー・ガーデンで、彼はアメリカの子ども達と一緒に英語の基礎をみっちり教え込まれた訳です。

キンダーガーデンでの英語の指導は、アルファベットの発音、書き方に始まり、単語のスペル、構成、発音など大変きめ細かです。先生が大きな口を開いて発音し、一人一人に言わせ、何度もやり直しをさせる。まるで、日本では言語治療教室のような光景です。ヘッドホーンをつけ、テキストを目で追い乍らお話を聞くという学習(Listening)もたく山あります。アメリカ人になぜこんな学習が必要なのか解せませんが、人種のルツボと言われるニューヨークの公立小学校の宿命なのでしょうか。

英語不自由児を多数かかえ、まずその言語教育から始めねばならない、そんな学校に学んだことは、まさに不自由児であった日本人の子ども達には幸いだったかもしれません。こんな指導のおかげで、浩史は一年生になった時には彼らに劣らぬ英語力を

つけていました。少なくとも学校での読み、書き、作文に困ると言うことはなく、むしろ良い成績を頂いて、なんだかアメリカ人のお友達に悪いような気がしたものです。

一方、彼の日本語も、四歳の舌たらずから上達してはいたものの、英語程には上手にならず、ちょっとおかしな日本語になってしまいました。英語が混じったり、「水道を消して」「くつ下を着る」と言う具合です。親はちゃんとした日本語を使っていたはずなのに、どうしてこんなことになってしまうのか。

貴宏は小さかったせいもあって、浩史程耳障りではありませんでしたが、やはりおかしな日本語でした。その点、真由美は、単語で出てしまうことはあっても、決して「くつ下を着る」などとは言いませんでしたから、言葉を覚える時期が原因であったのかもしれません。

真由美の英語

九月の新学期から、真由美再び一年生。夏休みのおしゃべりが効を奏し、張り切っていました。個人別、グループ別の指導ですから分からなくて取り残されると言うこともなくマイペースで教えてもらえ、英語の勉強も楽しそうでした。家に帰って来れば、お母さんや弟達は眼中になし、近所の仲間と遊ぶのに夢中。そして、私にはよく分からぬ言葉でペチャクチャよくしゃべること。彼女の会話の上達は、この仲間達のおかげでした。何をしゃべっているのか尋ねても、「日本語では言えない」との返答が返って来ます。

でも本を読んだり、日本語に訳したりではまだ私の方が優勢。彼女の学習に私が口をはさむ余地がありました。書くこととなると全くだめで、最初の数か月は、作文の宿題は免除になっていました。この時のクラスはスマートクラス（優秀クラス）だったので、学習内容も高度で、最初から毎日英作文がありました。必ずしも英語の勉強だけでなく、社会科や理科の学習も含まれるようでした。

四か月程経った一月のある日「今日は自分で作った作文を初めて先生に出して来た」とうれしそうに報告です。この日の題は「お父さんの仕事」だったとか。夜になって、スペルを尋ね尋ね、作り直しをしました。それからは作文が楽しくて、宿題も提出できるようになりましたが、まだまちがいだらけ、短い文の寄せ集めです。この頃、週一回、土曜日の日本語教室では一年生の三学期、作文の宿題も出ました。一年生なりに作ることができ、まだそんなに嫌いではありませんでした。

そんなある時、「真由美ね、この頃、時時日本語忘れたみたいなことがあるの。日

本語が頭の遠くの方に行ってしまったみたい」ともらしました。そう言えば、私に話しかける時、一生懸命思い出そうとしている様子が見られたり、単語が英語で出て来てしまったり。彼女の英語が私にどんどん追いつき、追いこさんとして行くのがひしひしと感じられ、どうかすると私の方が彼女を頼りにしていることがあったりしました。そしてついにある晩英語の寝言を耳にしてしまいました。よく気をつけていると独り言も英語になっているのです。

そして二月始め、突然二年生に進級。九月の懇談会で、英語ができるようになったら途中でも二年生にしますと言われたことを思い出し、とうとう彼女も英語の人間になってしまったかと、複雑な気持になりました。二年生のクラスでも、個人別、グループ別指導、その上ミドゥルクラス（中クラス）だったので、特に困りもしませんでした。英語のリーダーだけ元のクラスに戻って習ったり、しばらくは両方のクラスを行ったり来たりしていたようでした。

それまでは自分で読むようになっていた日本語の本、この頃になるとめんどくさがって私に読ませます。自分で読みなさいと言うと英語の本を読んでしまうのです。反対に英語の本を読んでやると、自分で読む方が分かりやすいからと断わられてしまうようになりました。英語が自由自在になって行くにつれ、日本語はますます忘却の彼方へ。

それで日本語教室の勉強も苦痛になる一方でした。宿題もさぼってばかり、ところが三年生になって、先生に叱られるのがいやで、やむなく作文を提出しなければならなくなった彼女、一案を講じました。まず自分で英語の作文を作り、それを私に翻訳させるという訳。こんな一時しのぎをしていたばかりに、ますます日本語から遠くなってしまいました。

貴宏とお母さんの片言

一歳六か月で日本を離れた貴宏は、マンマやンンで意志の通じる頃でした。ニューヨークとは言え、活動範囲は家の中とまわりだけ。その頃から盛んに覚え始めた片言が、「ママコッコ」（ママここへ来て）「パパナー」（パパいない）等、日本語であったのは当然でしょう。けれども子ども達の遊びを眺めているうちに、声かけられるうちに、一方では英語が入っていたのも事実。

二歳の頃になると「ゴウゴウ」とお兄さんの後追いかけたり、「ノウ」と返事が返って来たり、そして、いけませんよと言われれば「イエチュー」、しなさいと言われれば「ノウー」と反抗の芽生えまで。お姉さん達の遊びに加わっている時には「マイン」（ぼくの）「ミッチー」（見せて）など、

だんだん英語がふえて来ました。テレビのセサミストリートを見ながらＡＢＣの口まねしたり、積木を数えながら「ワン」「チュウ」。日本語ではこの時「一つ、二つ」と「いーっぱい」の区別はついていましたが、この後数字は英語で入ってしまい、日本語では覚えられませんでした。

ある時、街のピザ屋さんに入りました。店の中では、イタリヤ人のピザ屋さんはイタリア語、私達は日本語。隣のテーブルには中国語の親子、その向うにはスペイン語のおばさん達、という光景に出喰わし、これは大変な街だと思ったことがありました。こんな所ですから、英語がへたであっても、別にかまいはしないのですが、あまりにも喋れないと言うのも不便な事で、私も会話クラスに通ったことがありました。多くの移民をかかえているニューヨーク市ですから、その対策には少なからぬ財源が費され、各所に公立の会話教室が設けられています。又、教会が催しているものもあり、ここの先生はボランティア。私の通ったのはこうした教会の一つでした。

その日は大変に寒く、途中から降り出した雪が、勉強の終わる頃には真白に積もってしまいました。外の雪に気付いた貴宏、喜びの声を上げました。「ソソ（外）ユキアッタ、ユキアッタ……」もう止まらなくなったみたいです。そして家の近くまで帰って来た時、路上に駐車している郵便トラック見上げ「ブーブ、ダーレモイナイ、ダーレモイナイ……」いつもは乗っているおじさんの姿が見えません。

その日、会話の先生のミセス・マグワイヤーに言われた事を思い出しました。「覚えた文章は何度も口に出して使ってみなさい」と。新しい言葉をどんどん覚え、すぐに使えるようになる子どもの柔軟な頭、ほんとうにうらやましく思ったことです。そして、私も貴宏とさして変わらぬことを口にしているのではないか、とがっかりしたことでもあります。

枯れた芝生の間から、クロッカスの小さな緑がのぞき、それに黄や紫の花がつき始めるともう春。まだ冷たい風に、頬を真赤にしながらも、子ども達は春を感じて外をかけまわります。そんな子ども達の声にまじって、貴宏の声も聞こえて来るようになりました。そろそろ一年になろうとする頃です。

「ヘルプミー、ヘルプミー」（助けて）「マユーミ、ウェアラーユー」（まゆみどこ？）「ママー、ハリアップ、クウィック　クウィック！」（ママ早く早く！）と。日本人を見ると「オバシャン」と声をかけ、アメリカ人と見るや「ハロー」。日本語で尋ねられると「ウン」（はい）「ナイナイ」（ちがう）。英語で尋ねられると「イエス」「ノウ」。ちゃんと使い分けて、決してまちがえることはありません。

「一・二・三」と言われると、「ワン・トウ・スリー」と教え直し。発音もずい分英語らしくなって来ました。日本語ではすっかりおしゃべりになっていました。「オバシャン　チッコ　イナイ　イナイ　ユッタ」（おばちゃんに　おしっこ出ないと言った）と言う具合に。

貴宏ナーサリーへ

後二か月で四歳になるという時、彼は無理矢理ナーサリーへ入れられることになりました。どうしても出かけたかった私の為に。

彼の通った「ジョリータイム　ナーサリースクール」は、これもニューヨークには非常に多かった、ジューイッシュ・センターの経営で、共働きの親の為の保育所という感じの所でした。その為、必要な時には給食を食べさせてくれたり、保育時間が過ぎても、安い料金で預かってくれるという融通の利く所でした。

行事や休日はジューイッシュのそれに準じていましたが、保育に宗教的なものはなく、預けられている子ども達もジュイッシュだけでなく、いろいろでした。アパートの一室を借りていた、この狭いナーサリー、貴宏は最後まであまり好きになれませんでしたが若い保母さんはとても親切な方でした。迎えの時間が遅れると、事務所には内緒と言って貴宏にも給食を食べさせていて下さっていました。イスラエルから来た両親と英語が喋れないで苦労しているとのことだったので、会話に通っていた私に協力して下さったのでしょう。

休むことの多かった一年間でしたが、それでも日本語の全然通じない場に入れられたことで、彼の英語は見る見る上達し、二か月も経つと、私に話しかける以外は全部英語になってしまいました。日本人のお友達と、今までは日本語でバットマンごっこをやっていましたのに、自分が英語を使い出すと、「日本語のバットマンじゃおかしいよ」と、英語バットマンのお兄さん達の方へ鞍替えです。

片言時代から耳慣れていた為でしょう、二年前の浩史のような問題は全く起こしませんでした。むしろ日本語で、三歳過ぎの頃「たか言えれない。ママ言って」と言う時期があり、話し具合で彼の言わんとする事が分かる時は良いのですが、見当もつかないと「ママは何にも知らない」と怒って泣く、浩史と同じ現象が生じました。でも、英語で困らされた記憶はありません。

帰国後

三人三様ではありましたが、英語しか通じない環境に入れられた時、彼らも英語の世界に入って行ったようです。家の中で

も、彼ら同志は全部英語でした。でも、どんなに夢中になって喋っていても、「ママ」と呼びかけた瞬間、日本語になってしまうのです。その点、まだまだ日本語の座があったわけです。でも、その切り替えの見事さ、くやしいやらあきれるやら。

こんな彼らも帰国後一年、何とか覚えているのは真由美だけで、下二人はすっかり忘れてしまいました。今では宝塚弁でかけまわり自分が英語を喋っていたなんて、不思議で仕方ありません。

貴宏は忘れるのも、宝塚弁になるのも最も早く三か月。浩史は六か月位までは真由美と英会話していましたが、今では全く出て来ません。そして彼は、日本語に移行する時にも英語の時と同じようなトラブルを起こしかけ、テレビを見ながら英訳をしてもらう時期がありました。未だに、先生のお話でも聞きとれない事があるようです。でも書くことが好きで、そっちの方ではうまく移行でき、書いて表現します。

一方真由美は、おしゃべりの方は問題なかったのですが、書く方が大いに困難、未だに英語の方がすらすら出て来て、翻訳作文です。算数でも、数字は英語のままで計算されているようです。同じように英語、日本語を往復しても、子どもによって、その行程、難所はずい分ちがうものだと思いました。

英語になったとたん無口になってしまう私は、今では思う事が何でも喋れ、何を喋っても理解してもらえ、こんなにうれしいことはありません。ニューヨーク市が、なぜあんなに言語指導に力を注いでいたか、今頃になって、分かるような気がしています。

（つづく）

日本保育学会第31回大会のお知らせ

期　日　昭和53年5月20日(土)・21日(日)

会　場　香川大学

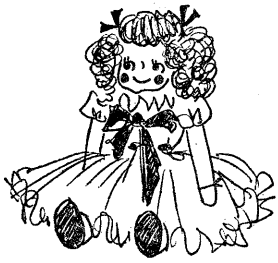
大会に関する連絡先は次のとおりです。

〒760　香川県高松市幸町1—1
香川大学　教育学部心理学教室内
日本保育学会第31回大会準備委員会（佃　範夫）
電話　0878(61)4141　内線 284

保育の体験と思索

―子どもの世界の探究―（十六）

津守　真



四歳児の二学期の幼稚園で、私が出会ったことの中から、四歳児の生活と、それにかかわる保育について考えてみようと思う。

十月十八日

朝、男児Nが、葉っぱの上にのせたいもむしを、「ほら」と私に見せにくる。私は、久しぶりでNとつきあえそうだと思い、Nについてゆく。バラ棚の中にM、S、Kがいる。みんな、いもむしをさがしている。Nは、私に肩車してくれと言い、私はNを肩にのせて、バラ棚のところのみかんの木のまわりを歩くが、いもむしは見つからない。Kも肩車してくれというので、肩にのせるが、Kは、のるのもおりるのもへたである。

いろいろな子どもとの出会い

Nは体力もあり、力の強い子どもである。ある時期から私に親しみを寄せてくるようになった。この日は、朝、私が幼稚園の園

庭にゆくと、すぐにいもむしを差し出して見せてくれた。私はNの親しみの情を感じることができた。バラ棚の下にゆき、他の子どもたちといもむしさがしをするうちに、Nは私に肩車をして高いところの葉をさがすことを思いついた。Nは体力も運動能力もあるので、私の肩にのると、体と手を伸ばして、あちこち移動することを要求し、その要求は次第に高くなる。

Kも私に肩車をしてもらいたがる。Kは私の肩によじ上るのがようやくで、私が立って歩くと、こわごわつかまっているのが精一杯である。私の肩からおりるときも、ころびそうになる。Kの方は、Nに比べると、運動能力も少なく、肩の上でも、ためらい、こわがり、不安定であり、しかも、高いところにのった快感があるらしいことが、私に伝わってくる。同じように肩車をしていても、NとKとでは、私に伝わってくる感じが違う。一方は自分の能力をもっと高めようと、能力の増強を目指し、他方は、繊細な感情をもって人につかまっている。NとKのこのような相異は、この後も、いろいろの機会に感じられた。

バラ棚の下に、木の卓子がある。Mがその卓子の脚の下をのぞきこみ、そこになめくじとこおろぎを見つける。指をいれたり、卓子をずらしたりして、虫をさがす。そのうちに、Nはくもの巣にくもがいるのを見つけて、くもをおとしてつかまえ、ビニールの袋にいれる。他の数人の子どもたちも、くもの巣をさがしてくもを落すことに夢中になる。バラ棚の裏の傾斜地をよじ上り、山の方にゆき、くもの巣さがしをする。冷たく静かな木々の繁みの中で虫さがしをしているときには、数人の子どもたちと私だけで、私も久しぶりに虫とりのスリルを味わった。

虫とり

この幼稚園には、平地の園庭のほかに、小高い木の茂みがあって異質な空間を作っており、静かな自然の雰囲気がある。子どもたちは、お山と言いならわしているが、幼稚園の園庭としては実に恵まれている。幼稚園の庭は、運動場のような見通しのきくひとつの空間だけでは不十分で、樹木の繁みや、人目から遮ぎられた安全な空間が必要なのであると思う。それは、数人の子どもたちと自由に過せる空間である。夢中になって虫さがしをしている子どもたちと、木の葉の間を身をかがめて歩きまわっていると、他のことは消え去って、繁みの中の時間だけがいつまでも続いているように思えてくる。少年の頃に、田舎の自然の中で、半日、

虫とりをして過した記憶が突然よみがえって、私は久しぶりで、木の葉や土のにおいにふれた気がした。実際にはほんの短かい時間であるけれども、それは、普段の園庭や保育室の一時間よりも、もっと長く感じられた時間であった。

子どもと一緒に遊んでいて、それ以外のことは念頭から消えてしまうようなとき、私は、現実の時間をこえて、その底にある永遠の時間の中で遊んでいるような気がすることがしばしばある。この虫とりもそのような一例であるが、以前にも書いたことがあるように、(七十五巻一号等)遊びの種類は、鬼ごっこやかくれんぼや、単純な砂あそび、いないいないばあの赤ちゃんの遊びなどいろいろである。

このような永遠の時間は、子どもの遊びにふれたときにおとなが感じとるものであるから、ある状態における子どもの生活が有している時間であるに違いない。それをたまたまある状態におけるおとなが感じとるのであるから、おとなの中にも存在している時間であるに違いない。おとなは、子どもと遊ぶときに、いつでもその「時間」を感じとることができるとは限らない。目標や功利から自由になって、子どもの精神に直接ふれることができるような、いわば澄んだ精神状態になっていることが必要になる。そのような条件は、おとなには稀にしか訪れてこないから、おとなは稀にしか感じとることができないのである。

他方、子どもの場合も、本当に真剣にそのものに打ちこんで遊んでいる時に、現実の時間から離れて、過去も現在も未来も一つになった永遠の時間に入ると考えられるから、子どもは常に永遠の時間に生きるとは言えないだろう。けれども、子どもが遊ぶときには、おとなよりももっとしばしば、前後を忘れてこの遊びに身を委ねているから、またおとなのようにさまざまな枠に縛られていないから、おとなには気が付かれないところで、しかもしばしばおとなの目の前で、子どもは、現実をこえた永遠の次元の時間に生きているのであろう。

永遠の時間にいることを示す子どもの行動は何であろうか。それは特定の種類の遊びに限られるものではないことは前に述べた。むしろ、子どもらしさの溢れている姿そのものと言えようか、これを視覚媒体におきかえるならば、写真や絵画にあらわれた子どもの姿であって、一つの単語におきかえることは困難なように思われる。

そのような子どもの「時間」に共感するおとなの具体的行動は、ともに動くこと、あるいは、たたずむことを挙げられる。(もっと他にもあるかもしれないが)ともに動くときのおとなは、子どもと離れた所に立って指示し、指図するおとなではなくて、

子どもと同様の動きをするおとなと言えよう。ただずむは、立って動きまわるだけではなくて、立ち止まる状態である。それは日本語では、住むこと、あるいは澄むことにも共通の語であるから、一つ所に落ち着いて見ている状態でもあり、また、浮遊物を沈澱させて、精神を透明にさせる状態ともいえよう。[注1] あるときには子どもと動きを共にし、あるときには、たたずんで、心を澄ませて子どもを見るときに、子どもの世界にふれることができる。

まもなく、くもの巣をさがして、木の繁みの中の小径の柵の内側に入ってゆき、くもの巣をおとそうとする。はじめ、なわとびのなわを投げる。それからの考えで、シャベルをなわの端に結びつけてふりまわすと、何べんか試みるうちに、くもを落すことができた。木の繁みの中の小径に、年長組の女児がいた。その中の一人が、「ちょっと　あんたたち」と手を腰にあてて、威たけ高に言う。「そこは入っちゃいけないところでしょ。さくの外でやりなさい」Mたちは、公然と抗議もできないで、くもの巣になわを投げつづける。「そこはにわとりしか入っちゃいけないのよ。あんたたち、にわとりなの？」「にわとりかさるしか入っちゃいけないところよ、あんたたち　にわとり？　さる？」と言う。そうすると、Nが「人間はむかしはみんな猿だったんだよな」と小さな声でいう。

威たけ高になること

男の子たちは夢中になって虫とりをして、小径からはずれた木の繁みの中に入っていった。小径に沿って低い竹の柵があって、一応、路と繁みの中とを区切ってある。その柵の内側の繁みの中に入って男の子たちが虫とりをしているのを見て、年長の女の子が、「ちょっと、あんたたち」と威たけ高になって声をかける。このとき、女の子たちは、心理的にも、男の子たちと違う空間に立っている。手を腰にあてて、背丈をのばして男の子たちに向って立つとき、物理的にも、男の子たちと女の子たちを隔てる壁があるように思われる。禁止し、規制する側に立つ者は威たけ高である。

私は二つの異なった空間の間に立って困惑する。女の子と一緒になって権威の側にだけ立つことにはためらいがある。虫とりに夢中になっている世界は大切にしたいと思う。けれども、こう言われたからには、それを無視して男の子の側にだけ立つこともできない。そこで、私が実際に言ったことは、「おじさんも　ここ

に入っちゃいけないことを知らなかった。くもはここしかいないんだ。これとるの面白いんだぞ。だから一寸やらしてくれ」ということだった。すると女の子は、「くもの巣ならむこうにあるから、あっちのとりなさい」と言って、山の上の広場の方を指さした。

だれかが走っていってそちらにゆくが、くもの巣は見つからない。女の子は「あら、もうどこかにいってしまった」と言って、それ以上何も言わずに立ち去った。それで、男の子たちは、柵の中の木の繁みのくもの巣をとりつづけることになった。ここで私が言った言い方が、果してそれでよかったのかどうか、よく分からない。第三者からはいろいろ批判があるだろうと思う。しかし、その場で、とっさの間に、私はどちらかの側だけに立つことができなかったのである。

威たけ高になる権威の側に立つことは、その世界での優等生になることである。しかし、その世界では、はみ出し者であり劣等生である者にも、別の世界がある。どちらかを優等生あるいは劣等生にするのではなく、いずれも、自分自身の世界を見出すべく学んでいる者として見てゆきたいと思う。

虫とりをしていた男の子たちは、M、N、K、S、Shの五人である。最後はくもの巣の中央にいるくも捕りになったのであるが、その五人がそれぞれ、虫とりに対して、異なったかかわり方をしている。MとNは、くもになわとびのなわを投げて、くもを打ち落す。投げるなわの方向も適確で要領がよい。Shは、何か叫びながら、まわりをとびまわっていて、MとNの走り使いをする。Mが「まりとってこい」と言うと、「まりとってくるぞー」と言って、走ってとってくる。Sは、ビニールの袋をもって、だまってその辺をさがしまわり、木の実などがあると、それも拾って袋にいれる。Kは、うろうろついてまわる。この五人の生き方のそれぞれに面白さを感じる。

いろいろの子どもたち

MとNはくもに何かを打ちあて、落そうとしており、その目標の達成のためには、いろいろの方法を考え、他の子どもに命令もする。これをくもとりの作業グループと見るならば、最も指導的な位置にある。Shは何か叫びながら、まわりでとびはねて、命令されると、張り切って進んでとりにゆき、興奮に目が輝いている。

作業グループの観点からみれば従属的位置にある。

ここにしばしば、Shのように従属的な子どもにも、指導的な役割をとらせるような配慮がなければならないというような議論がなされる。私はそれは一つの側面からの見方であるとは思うが、事実にはもっと他の側面がふくまれていると思う。Shは、MやNほどに運動能力もなく、大きく強い子どもたちと一緒になって遊ぶスリルを楽しんでいる。これからいろいろの経験をつんで、成長し、自分自身の見方ができていくならば、いつまでも従属的な位置にいるとは思えない。

また、こうした作業において、くもに打ち当てて落すという目的に直進することが良いとは限らない。木の繁みの中で何かを探して時間を過し、友だちと共にうろうろする楽しみは良いものだと思う。

Kはまさにそういうあり方をしていた。また、Sは、だまってその辺をさがしまわり、木の実を見つけるとこれを袋にいれていた。Sは以前から小さな灰色の実や、赤や黄の木の実をさがすのが好きで、みんなと一緒についてきても、自分の作業をはじめる。どの子どものあり方も、それぞれの子どもの性質をあらわしており、こうした一つの場面におとなが立ち合ったときに、できるだけそれぞれの子どもと、じっくりとつき合うことを考えればよいのだと思う。

くもの巣

虫とりをしているうちに、次第に、くもの巣の中央にいるくもに、なわとびのなわや、ボールを投げて打ちあて、落すことが盛んになってきた。

くもの巣は、見ただけでも渦巻の形態をなし、その中央に位置している大きなくもは、一段と目をひく存在である。くもの巣の中心に坐するくもは、インドの神話によれば、世界の中心のシンボルである。くもの巣は破れやすく、しかもくもはたえず破れをつくろい、新たな渦巻を作るから、くもの巣は、うつろいやすい幻影の世界のシンボルでもある。[*注2] 建設と破壊のたえざる反復であるくもの巣は、勢力の交替のシンボルでもある。くもは古来、月の動物とされている。月は光の反射という受動的性格をもち、また、満ち欠けを反復するので、移ろいやすい現象界、空想界と関連づけて考えられており、それぞれの人間の運命の糸を織りなす動物として、くもになぞらえられるのである。

子どもは、くもの巣を見て、これらのことを頭に思い浮かべは

しない。けれども、薄暗い木の繁みの中に、あちらにも、こちらにも、仄かに光るくもの巣を見つけるとき、彼か神秘的な思いをもつであろう。

とくにくもの中央に坐するくもには、特別の関心をひかれるのも自然であるが、その中心に物を打ち当て、落すことのみが目標となって、そのためにあらゆる手段を考えるようになると、とたんに、すべてが現実界のできごととなる。能力の高い者は、目標に向って直線的に行動し、そのルート以外のものは目に入らなくなる。能力の高い者と低い者との差は、優劣の序列をもって明瞭に見えてくる。

私は、くもの巣を見てたたずみ、まわりでうろうろしてとびはねる子どもに、親しみを覚える。

あるところで、急に虫とりは終って、子どもたちは園庭におりてきて、みんなばらばらになる。

いま、ここに記した虫とりの過程をふりかえってみると、前半においては、木の繁みの中で友だちと一緒に虫をさがす想像の世界にあり、後半においては、虫を当て落すことに焦点が向けられて、現実界に転換したのではないかと思う。虫とりでも、木の実集めでも、子どもたちが、自分たちのペースで動いているときには、虫とりや木の実集めだけでなくそれをとり巻くさまざまなことを一緒に楽しんでいるのだが、欲望に従って集めることだけに目標ができると、遊びの性質が違ってしまうのである。

子どもによって、そう陥りやすい子どもがあるかもしれない。しかしまた、だれでもの心の中の二つの面でもある。小さいときから、こういう遊びの中におとなが介入しすぎて、能率のよいやり方を教えてゆくと、他のことが見えなくなってしまう可能性は強い。このことは、くもの巣だけではなく、いろいろのことについていえると思う。

（つづく）

注1　大野　晋・佐竹昭広・前田金五郎編『古語辞典』岩波書店

注2　Cirlot, J. E. Dictionary of Symbols Roupledge and kegan Paul, 1962.

異なった二者を一つに合わせるには、様々なしかたが可能である。「結ぶ」「混ぜる」など、いずれもその例であろう。のりを用いて「貼る」という方法も、私どもの祖先が見出した優れた技術の一つであった。

「結ぶ」ということが、異質性を目立たせたまま一時的なつながりを保たせる方法であるとすれば、「混ぜる」は、各々の独自性を抑えて共存させる。これらに比して、「貼る」は、お互いがお互いでありつつも、いつか分かち難く一つになり、継ぎ目もなくつながり合ってしまう、と言う特性を持っている。「結ぶ」の直截さ・力強さ、「混ぜる」の親しさ・温かさにくらべて、「貼る」には、控え目な行儀のよさがある。

結ばれたものは、ほどけば速かにもとの二者に分かれる。一方、混ぜられたものは、容易に旧には復さない。これらに対して、貼ることは、丁度中間に位置するのではないか。何故なら、伝統的な「のり貼り」は、密着するまでに時間を必要とするが、乾いてしまうとぴったりとすきもなく重なり合う。それでいて、再び湿気を含ませ、時間をかけてゆっくりとはがすなら、お互いを傷つけ合うことなく、独立の二者に分かれることも可能なのだから。

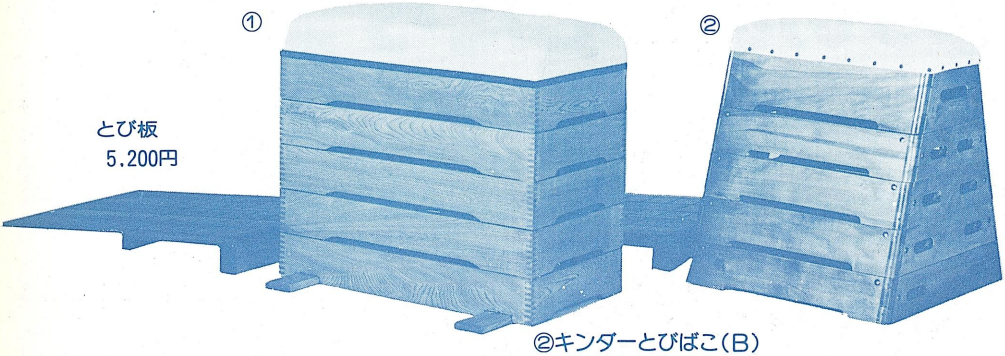
人と人、或いは人とものが、新しく一体化していく際にも、同様の過程が存在するのではないか。荒々しい結合も、混然と融合することも大切であろうが、ゆっくりと時間をかけて入念に行なわれる接合も、必要なのである。接着剤の開発に伴い、速効性への期待が増大しつつある。然し、「貼る」という営みに含まれたくさぐさの性格を、軽々しく見落とすべきではないであろう。（本田和子）

幼児の教育　第七十七巻第六号
六月号　©　定価二二〇円
昭和五十三年五月二十五日　印刷
昭和五十三年六月一日　発行
112東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　津守　真
112東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
108東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社
101東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京—九一九六四〇番
⊙本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

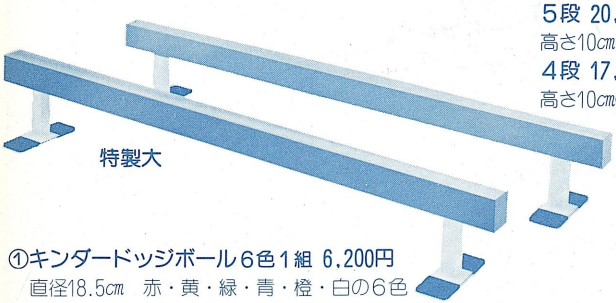
※万一製品不良本がございましたら，おとりかえいたします。

夏にむかって体力つけよう！

①キンダーとびばこ（A） 24,000円
高さ10㎝（４段）＋20㎝（頭部１段）長さ70㎝・幅35㎝

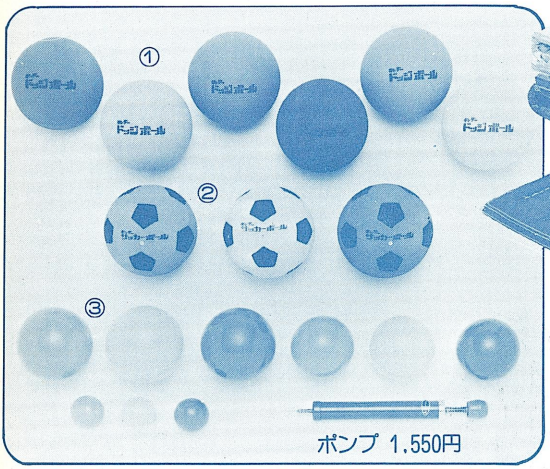


②キンダーとびばこ（B）
5段 20,000円
高さ10㎝（４段）＋20㎝（頭部１段）長さ53㎝・底部幅53㎝
4段 17,000円
高さ10㎝（３段）＋20㎝（頭部１段）長さ53㎝・底部幅47㎝



平均台
特製大 26,000円
長さ250㎝・高さ35㎝・幅10㎝
特製小 21,000円
長さ180㎝・高さ30㎝・幅10㎝
いずれも橙・黄緑・水・桃の４色
普及型 13,000円
長さ200㎝・高さ30㎝・幅９㎝

①キンダードッジボール６色１組 6,200円
直径18.5㎝　赤・黄・緑・青・橙・白の６色
②キンダーサッカーボール３色１組 4,100円
直径18.5㎝　白・橙・青の３色
③キンダーカラーボール
大直径15.2㎝ 400円　中直径12.7㎝ 300円　小直径７㎝ 100円



ポンプ 1,550円

キンダーカラーマット
１枚 17,000円
長さ180㎝・幅90㎝・厚さ５㎝
赤・黄・青・水・白の５色
キンダースクエアーマット 38,000円
長さ180㎝・幅180㎝・厚さ３㎝
キンダーマットA 15,500円・B 14,500円
長さ180㎝・幅90㎝・厚さA＝３㎝・B＝５㎝

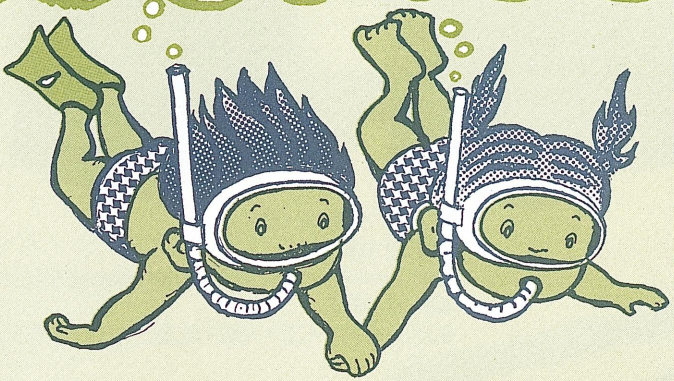
くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・本社営業課　TEL 東京(03)292－7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

夏休みを規則正しく元気に!!

キンダーブックの

なつのおともだち



▲年少用

▲年中用

▲年長用

●今年も内容を充実させて、楽しくわかりやすくしました。

☆年少用

とらの子どもを主人公に、子どもの夏の一日の生活を、絵本風にまとめました。　A４判 200円

◉付録「なつのせいかつ」（生活表）Ｂ４判二つ折

栽培用「赤花クローバのたね」

☆①年中用

子どもたちが楽しみながら、いろいろなことを考え、学びとり、充実した遊びができるように配慮してあります。Ａ４判 200円

☆②年長用

年中用の編集方針を基本とし、さらに、子どもたちが、夏休みの楽しい遊びに積極的に参加し、そのなかから自分の仕事を発見できるように配慮してあります。　A４判 200円

◉付録（①年中用、②年長用共）

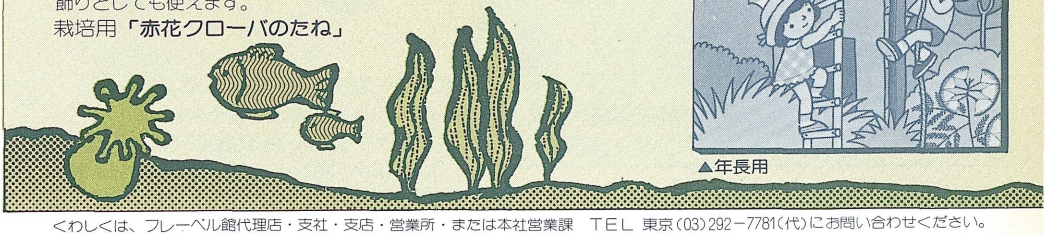
「なつのせいかつ」（生活表）Ｂ５判16頁

１週間ごとに約束事項を変えたり、簡単な日記にもなるよう、１頁１週間にしてあります。また旅行の際にも持ち運びしやすいよう冊子にまとめ、楽しい工作頁もついています。

「なつのこうさく」Ｂ５判

おもてとうらの色の変化が楽しく、できあがりが美しい新しい紙工作です。おもては黄、うらは青の特漉の紙を使用しています。糸でつるして、部屋飾りとしても使えます。

栽培用「赤花クローバのたね」



くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課　TEL 東京(03)292－7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館